氷見市埋蔵文化財調査報告第23冊

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅳ

１９９６年度

氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室
１９９７年３月

氷見市埋蔵文化財調査報告第23冊

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅳ

１９９６年度

氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室
１９９７年３月

序

富山湾に面し海の幸，山の幸に恵まれた氷見市は，古くより人々の生活の場として，数多くの文化遺産を育み，守ってきました。

特に，大正７年に調査された大境洞窟は，日本で最初の洞窟遺跡調査として，同じく朝日貝塚は日本海側有数の貝塚として，学史にその名を留め，国指定史跡になっております。

しかしながら，近年，生活の豊かさ，利便さを求めて開発が進められる一方で，これらの貴重な文化遺産の保護のための営みも重視されているのであります。

市教育委員会といたしましては，文化遺産保護のため，市内全域の詳細分布調査を実施することにより，より充実した遺跡地図を作成することにいたしました。

文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することは，真の地域社会の発展につながるものであると考えます。

この報告書がより多くの方々に利用され，文化財保護の一助となることを願っております。

終わりに，調査の実施及び報告書の作成にあたり，ご協力いただきました地元の方々，またご援助いただきました富山県教育委員会，富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に，厚くお礼申し上げます。

平成９年３月

氷見市教育委員会

教育長　江　幡　　武

例　言

1　本書は，富山県氷見市教育委員会が国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査の第4年度（1996年度）の，報告書である。

2　調査にあたっては，富山県埋蔵文化財センターおよび富山大学考古学研究室の指導と協力を得て，後記の調査団を編成してこれを実施した。

3　遺物整理・実測・製図・写真撮影は，氷見市教育委員会生涯教育課主任学芸員大野究と富山大学考古学研究室の全員が協力して，行った。

4　本文は，宇野隆夫・前川 要（富山大学人文学部），大野 究，河合 忍・稲石純子・近藤美紀（富山大学大学院人文科学研究科学生），岡田一広・梶田亜友美・小幡鮎子・小松博幸・後藤 晋・佐々木健二・佐藤慎・須田雅昭・高志こころ・高安洋治・滝川邦彦・塚田和也・戸籏暢宏・中島和哉・中野秀昭・西村倫子・早川さやか・三浦知徳（富山大学人文学部考古学研究室学生）が分担して執筆した。執筆の分担は文末に記した。

5　参考文献は本文末に一括し，通し番号を付して示した。

6　遺物番号は図版毎に通し番号を付した。実測図と写真の番号は統一して用いた。

7　採集遺物・記録書類は氷見市教育委員会で保管公開している。

8　編集は宇野隆夫・前川 要・大野 究の指導の下に，河合 忍・稲石純子・近藤美紀がおこなった。

目　　次

第1章　はじめに …… 1

1　調査の目的 …… 1

2　調査の経過 …… 1

3　氷見市の地勢と自然環境 …… 2

4　1996年度調査区の地勢と地区割 …… 4

第2章　分布調査の成果 …… 7

1　遺跡と採集遺物 …… 7

(1) 小窪廃寺 …… 7
(2) 小窪瓦窯 …… 7
(3) 田江大畠遺跡 …… 7
(4) 田江古墳群 …… 7
(5) 小久米B古墳群 …… 7
(6) 小久米B遺跡 …… 8
(7) 小久米馬場谷内遺跡 …… 8
(8) 日名田古墳群 …… 8
(9) 小久米A遺跡 …… 8
(10) 小久米A古墳群 …… 8
(11) 小浦城（池田城）跡 …… 8
(12) 久目千元遺跡 …… 9
(13) 久目子浦谷内遺跡 …… 9
(14) 久目梨谷古墳群 …… 9
(15) 久目梨谷遺遺跡 …… 9
(16) 久目大町遺跡 …… 9
(17) 久目桑の木遺跡 …… 9
(18) 久目トリノマエ遺跡 …… 10
(19) 久目安楽寺遺跡 …… 10
(20) 久目ゾウダナ遺跡 …… 10
(21) 早借ヤワタ遺跡 …… 10
(22) 早借サカタ遺跡 …… 10
(23) 新保横穴群 …… 10
(24) 谷屋A遺跡 …… 11
(25) 新保城跡 …… 11
(26) 中村栗屋古墳群 …… 11
(27) 谷屋B遺跡 …… 11
(28) 谷屋C遺跡 …… 11
(29) 中村天場山古墳 …… 11
(30) 中村城跡 …… 12
(31) 中村横穴群 …… 12
(32) 柿谷椎木出遺跡 …… 12
(33) 速川神社古墳群 …… 12
(34) 滝尾山遺跡 …… 12
(35) イヨダノヤマ古墳群 …… 12
(36) 上田C遺跡 …… 13
(37) 上田D遺跡 …… 13
(38) 上田E遺跡 …… 13
(39) 上田南儀遺跡 …… 13
(40) 高松城跡 …… 13

(41) 老谷滝の上遺跡 …… 14
(42) 老谷遺跡 …… 14
(43) 見内モリヒサ遺跡 …… 14
(44) 久目経塚 …… 14
(45) 久目覚地遺跡 …… 14
(46) 久目浄仙遺跡 …… 14
(47) 久目朴木遺跡 …… 14
(48) 久目大坪遺跡 …… 15
(49) 堂谷山古墳 …… 15
(50) 触坂広瀬遺跡 …… 15
(51) 桑ノ院吉谷遺跡 …… 15
(52) 桑ノ院金山遺跡 …… 15
(53) 御林山城（鞍骨山城）跡 …… 15
(54) 岩瀬番畑遺跡 …… 15
(55) 岩瀬谷内の前遺跡 …… 16
(56) 一の島城（岩瀬城）跡 …… 16
(57) 坪池白坂遺跡 …… 16
(58) 土倉ゴマジマチ遺跡 …… 16
(59) 土倉稲村遺跡 …… 16
(60) 坪池シャンドン遺跡 …… 16
(61) 日詰コブクロ遺跡 …… 17
(62) 熊無遺跡 …… 17
(63) 上田G遺跡 …… 18
(64) その他の採集遺物 …… 18
(65) 中村川田地区採集遺物 …… 19

2 遺物の散布状態……21
(1) 古代の遺物の散布状態 …… 21
(2) 中世の遺物の散布状態 …… 21
(3) 近世の遺物の散布状態 …… 21
(4) 小結 …… 21

第3章 おわりに……28

参考文献……30

図版目次

関連頁

図版1　D地区航空写真(1) …… 1947年撮影 …… 1～4
図版2　D地区航空写真(2) …… 1992年撮影 …… 1～4
図版3　遺物実測図(1) …… 佐々木・高志作成 …… 7～18
図版4　遺物実測図(2) …… 佐々木・高志作成 …… 17・18
図版5　遺物実測図(3) …… 佐々木・高志・梶田作成 …… 18・19
図版6　遺物実測図(4) …… 佐々木・高志作成 …… 19・20
図版7　遺物写真(1) …… 前川・河合・稲石・近藤・岡田撮影 …… 7～18
図版8　遺物写真(2) …… 前川・河合・稲石・近藤・岡田撮影 …… 17・18
図版9　遺物写真(3) …… 前川・河合・稲石・近藤・岡田撮影 …… 18・19
図版10　遺物写真(4) …… 前川・河合・稲石・近藤・岡田撮影 …… 19・20
図版11　D地区の遺跡と遺物採集地点(1) …… 小松・早川作成 …… 7～17
図版12　D地区の遺跡と遺物採集地点(2) …… 小松・早川作成 …… 8～15
図版13　D地区の遺跡と遺物採集地点(3) …… 小松・早川作成 …… 11～19
図版14　D地区の遺跡と遺物採集地点(4) …… 小松・早川作成 …… 10～18
図版15　D地区の遺跡と遺物採集地点(5) …… 小松・早川作成 …… 14～16
図版16　D地区の遺跡と遺物採集地点(6) …… 小松・早川作成 …… 15
図版17　D地区の遺跡と遺物採集地点(7) …… 小松・早川作成 …… 16・17
図版18　D地区の遺跡と遺物採集地点(8) …… 小松・早川作成 …… 17・18
図版19　D地区の遺跡と遺物採集地点(9) …… 小松・早川作成 …… 18・19

挿図目次

第1図　氷見市の地勢と地区割図 …… 佐藤作成 …… 3
第2図　D地区図 …… 小松・早川作成 …… 5
第3図　D地区地区割図 …… 小幡・後藤作成 …… 6
第4図　D地区遺跡分布図 …… 小幡・後藤作成 …… 22
第5図　古代遺物の散布状態 …… 小幡・後藤作成 …… 23
第6図　中世遺物の散布状態 …… 小幡・後藤作成 …… 24
第7図　近世遺物の散布状態 …… 小幡・後藤作成 …… 25
第8図　時期不明（弥生～古代）遺物の散布状態 …… 小幡・後藤作成 …… 26

第1章　はじめに

1　調査の目的

氷見市が人の活動の舞台となったのは，現在知られている限りでは，今から約1万年前，上庄川上流域の丘陵においてである。以後，遺跡は丘陵から海岸まで広く分布し，現在に至るまで連綿と人びとの営みが続いたものと思われる。

氷見市の遺跡の数は，大正7年（1918）の大境洞窟・朝日貝塚の発見以後，昭和47年（1972）の『富山県遺跡地図』では83箇所，昭和58年（1983）の『氷見市遺跡地図』では143箇所と，年々増加してきている。

しかし，これらの成果は系統だった分布調査によるものではなく，その範囲・時期などについて不明な点が多く，また未発見・未登録の遺跡も少なからず存在するものと予測される。

また近年の開発行為の増加に伴い，遺跡の保護と開発の調整が社会問題化してきており，中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において，埋蔵文化財の保護と活用のため，また保護と開発との調整のため，基礎資料として遺跡地図の一層の充実が望まれたのである。

2　調査の経過

このような状況のもと，氷見市では平成4年度からスタートする第6次総合計画の主要施策のひとつとして，「指定文化財の再調査はもとより，指定以外の文化財，埋蔵文化財の調査・発掘及び資料の収集に努め，活力ある文化財として，郷土の歴史的遺産の保護・顕彰を図る」ことをあげ，主要事業のひとつに「遺跡地図の作成」をあげた。

これを受けて氷見市教育委員会では，平成4年度に昭和58年の『氷見市遺跡地図』発行後の新知見を加えた『氷見市遺跡地図』〔第2版〕を発行し，234箇所の遺跡を登録した。

さらに平成5年度からは，この遺跡地図をさらに充実させるため，国庫補助事業として市内遺跡詳細分布調査を実施することになった。

調査にあたっては，氷見市教育委員会を中心とし，富山大学考古学研究室の全面的な協力を得て，下記の調査団を編成した。

調査の方針としては，市域の平野部全体を調査対象とし，7個年計画とすること，年度ごとに報告書を作成し，最終的にはより充実した遺跡地図を刊行することが決定された。

今年度の現地調査は，D地区について（第1図），1996年10月10日～11月30日までの間，計6日間，延べ190人余の参加を得て，実施した。　　（大野 究）

氷見市埋蔵文化財分布調査団

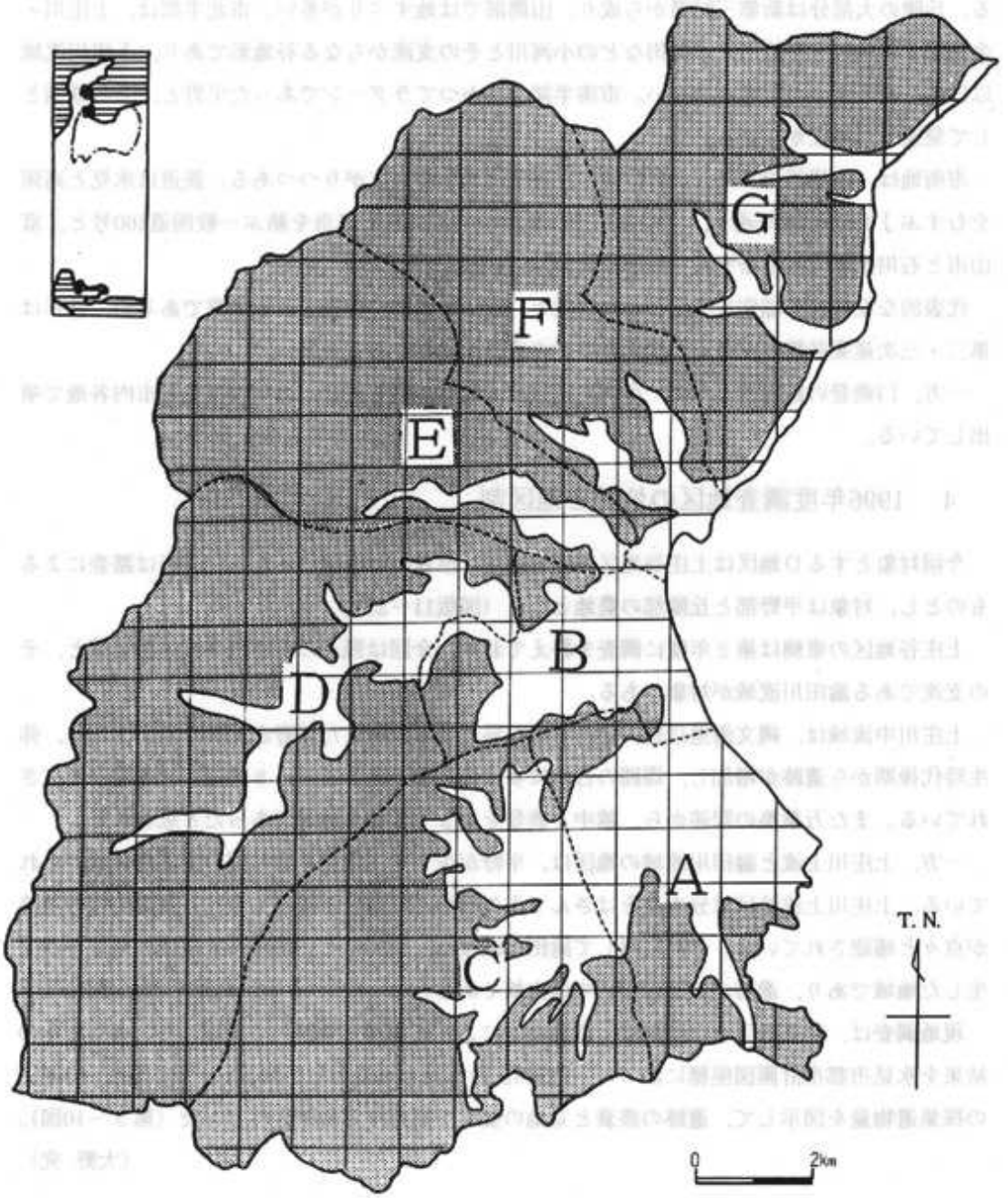
団　　長：江幡　武（氷見市教育委員会教育長）
調 査 員：宇野　隆夫（富山大学人文学部教授）
　　前川　要（富山大学人文学部助教授）
　　鈴木　瑞麿（氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員）
　　大野　究（氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員）
調査補助員：河合　忍・稲石　純子・近藤　美紀（富山大学大学院人文科学研究科学生）
　　中田　書矢・芳賀万里子・石井　淳平・井手口恵美・海道　雅子・工藤　直子・
　　小林　香織・田中慎太郎・田中　幸生・中島　義人・中谷　正和・平井　晶子・
　　藤田　良子・古屋　聡洋・松本　茂・宮崎順一郎・向井　裕知・本村　徹・
　　山崎　雅恵・浅野　良治・小野　基・金成　淳一・小島あずさ・清水あゆみ・
　　宿野　隆史・鈴木　悟嗣・鈴木　由紀・滝沢　匡・戸田真美子・栃谷　朋子・
　　野水　晃子・春名　理史・深田　亜紀・丸山　浩・三浦　英俊
　　（富山大学人文学部考古学研究室三・四回生）
調査協力者：岡田　一広・小幡　鮎子・梶田亜友美・後藤　晋・小松　博幸・佐々木健二・
　　佐藤　慎・須田　雅昭・高志こころ・高安　洋治・滝川　邦彦・塚田　和也・
　　戸簾　暢宏・中島　和哉・中野　秀昭・西村　倫子・早川さやか・三浦　知徳
　　（富山大学人文学部考古学研究室二回生）
　　荒木　慎也・飯田　良智・磯村　愛子・遠野いずみ・貫井　美鈴・廣瀬　直樹・
　　渡辺　樹（富山大学人文学部考古学研究室一回生）
事 務 局：島　勝彦（氷見市教育委員会生涯学習課課長）
　　井波　咲朗（氷見市教育委員会生涯学習課課長代理）
　　屋敷　宗一（氷見市教育委員会生涯学習課文化係長）
　　池田　幸代（氷見市教育委員会生涯学習課主任）
　　坂本　研資（氷見市教育委員会生涯学習課主任）
　　高野　弘文（氷見市教育委員会生涯学習課社会教育主事）
　　小谷　超（氷見市教育委員会生涯学習課主事）

（戸簾暢宏）

3　氷見市の地勢と自然環境

氷見市は，富山県の西北部に位置し，能登半島の基部東側にあたる。1952年の市制施行から1954年までに，太田村を除く氷見郡１町17村が合併し，現在の氷見市が成立した。面積は約230㎢，人口は約６万人である（第１図）。

市域は，北・西・南の三方が標高300～500ｍの丘陵に取り囲まれ，東側は富山湾に面してい



A地区	1993年度調査地区	E地区	1997年度調査予定地区
B地区	1994年度調査地区	F地区	1998年度調査予定地区
C地区	1995年度調査地区	G地区	1999年度調査予定地区
D地区	1996年度調査地区		

第1図　氷見市の地勢と地区割
（国土座標X＝138°59′55″、Y＝35°48′を基準として）

る。丘陵の大部分は新第三紀層から成り，山間部では地すべりが多い。市北半部は，上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川などの小河川とその支流からなる谷地形であり，上庄川流域以外は，まとまった平野が少ない。市南半部は，かつてラグーンであった平野と，その砂嘴として発達した砂丘からなる。

市街地は，海岸線のほぼ中央に位置し，近年は北と南に広がりつつある。鉄道は氷見と高岡をむすぶＪＲ氷見線が通り，主要道路では高岡市と石川県七尾市を結ぶ一般国道160号と，富山市と石川県羽咋市をむすぶ一般国道415号が通る。

代表的な産業は，稲作を中心とした農業と，ブリ定置網に代表される漁業であるが，近年は第二・三次産業就職者が多く，高岡市などの市外へ通勤する人が多い。

一方，口能登の観光地として，市内には旅館・民宿が建ち並び，近年は温泉も市内各地で噴出している。

4　1996年度調査地区の地勢と地区割

今回対象とするＤ地区は上庄谷地区西側であり，市域の南西部にあたる。調査は踏査によるものとし，対象は平野部と丘陵部の農地とした（図版11～21）。

上庄谷地区の東側は第２年度に調査を終えており，今回は残りの上庄川中流・上流域と，その支流である論田川流域が対象である。

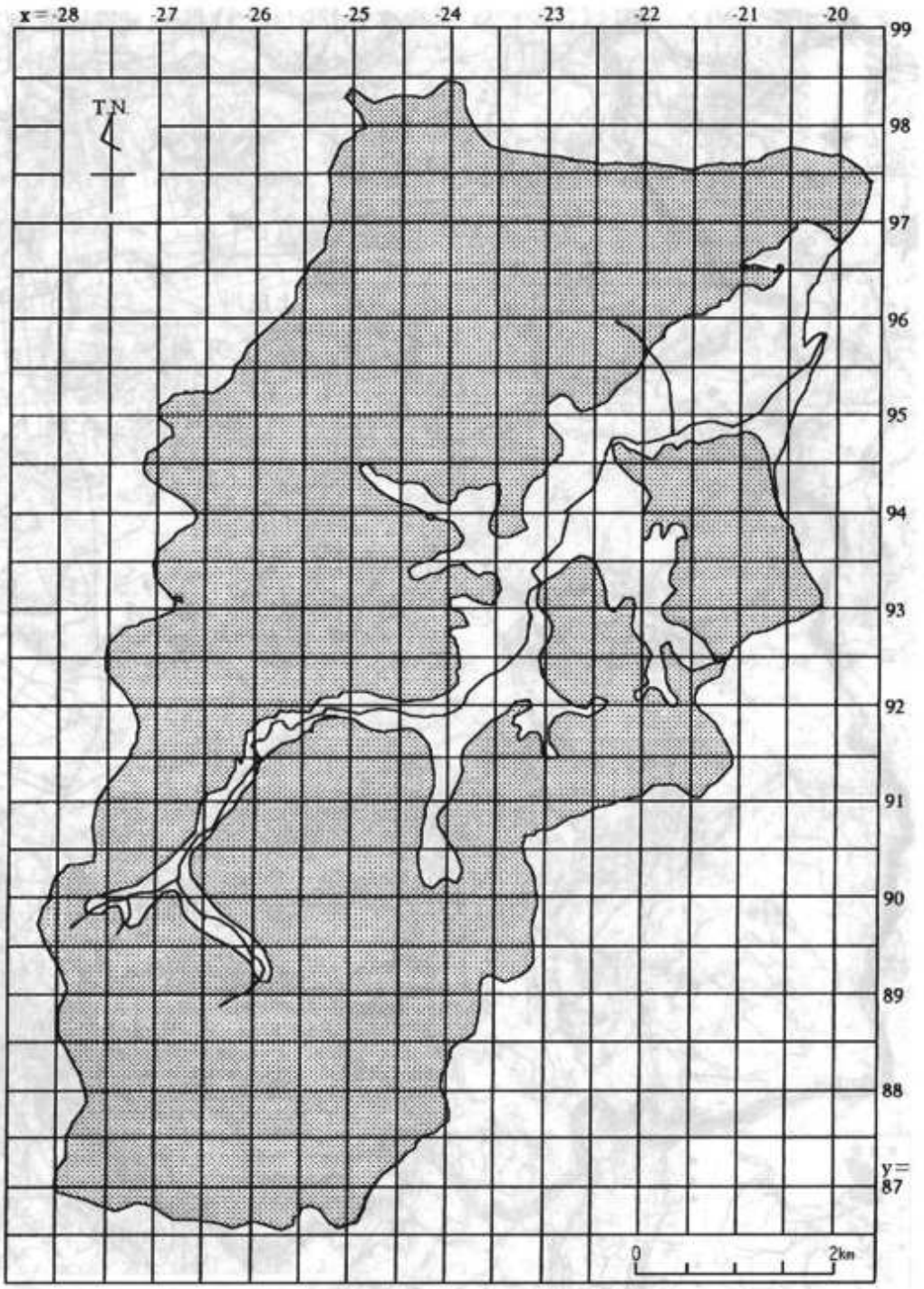
上庄川中流域は，縄文海進以後，市内で最も早くから安定した平野が開けた地域であり，弥生時代後期から遺跡が増加し，周囲の古墳に多くの古墳が確認され，８世紀には寺院が建立されている。また万葉集の記述から，越中と能登をつなぐ重要な地域であったと思われる。

一方，上庄川上流と論田川流域の地区は，平野が少なく，丘陵を切り開いて農地が設けられている。上庄川上流地区は分水嶺をはさんで小矢部川左岸地区と接しており，縄文時代の遺跡が点々と確認されている。それに対して論田川流域は，1890年と1909年に大規模な地滑りが発生した地域であり，遺跡の状況については白紙である。

現地調査は，調査地区を丘陵尾根，道路などによって大別・細別して実施した。そしてその結果を氷見市都市計画図座標に沿った一辺500ｍの方眼を単位として集計し（第３図），時期別の採集遺物量を図示して，遺跡の盛衰と立地の変化を把握する基礎資料とした（第５～10図）。

（大野 究）

第2図　D地区図（縮尺 1/75,000）


x＝-28
-27
-26
-25
-24
-23
-22
-21
-20
99
98
97
96
95
94
93
92
91
90
89
88
y＝87
T.N.
0
2km

第3図　D地区地区割図

第2章　分布調査の成果

1　遺跡と採集遺物

(1)　小窪廃寺（図版11の1，氷見市遺跡地図第2版94）氷見市小窪

本遺跡は上庄川左岸に位置し，北側より南へゆるく傾斜した地形に立地する。標高は約20mを測る。1965年前後に行われたほ場整備のときに大量の瓦が出土し，低地に埋められたという。軒丸瓦もあったというが，現在知られているのは平瓦と丸瓦のみである。また，須恵器も少量ながら表採されている。器種としては，杯蓋，杯，高杯があり，8世紀前半頃とみられている（西井 1987b）。現在は水田，畑として利用されている。

今回の調査において採集した遺物は須恵器3片である。そのうち2片を図示した（図版3の1）。

1は須恵器の高杯の口縁部である。口径は約13cmを測る。内外面共に横撫で調整を施す。胎土は密であり，灰色を呈する。焼成は良好である。

2は須恵器の杯の底部である。底径は約11.4cmを測る。胎土は密であり，色調は淡灰色である。焼成は良好である。

(2)　小窪瓦窯跡（図版11の2，氷見市遺跡地図第2版44）氷見市小窪

本遺跡は上庄川左岸に位置し，小窪廃寺の南約500mに所在する。標高は約25～30mを測る。これまでに平瓦と丸瓦が採集されたがいずれも破片であった。また小窪瓦窯と小窪廃寺の瓦に叩き目の同じものがあることが指摘されており，瓦の年代は白鳳～奈良時代前期に比定されている（西井 1987a）。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(3)　田江大畠遺跡（図版11の3，氷見市遺跡地図第2版162）氷見市田江

本遺跡は，遺跡の西側の丘陵より東へゆるく傾斜した斜面上に立地する。標高は約30mを測る。現在は水田として利用されている。縄文時代の遺跡として知られていたが，今回の調査において土師器1片，須恵器2片が採集され，そのうち土師器と須恵器1片は古墳時代から古代のものであったため，本遺跡は縄文時代及び古墳時代から古代の遺跡であることが確認された。遺物はいずれも小破片のため図示できなかった。

(4)　田江古墳群（図版11の4，氷見市遺跡地図第2版174）氷見市田江

本古墳群は上庄川左岸に位置する丘陵の尾根上に位置し，円墳5基が確認されている（氷見市教育委員会 1989）。田江大畠遺跡の西方約500mに位置する。標高は約75～82mを測る。現在は畑として利用されている。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(5)　小久米B古墳群（図版11の5，氷見市遺跡地図第2版173）氷見市小久米

本古墳群は上庄川上流の舌状丘陵の端に立地し，小久米集落の西約150ｍに所在する。本古墳群は田江古墳群に続く丘陵尾根上に所在する。標高は約25～70ｍを測る（氷見市教育委員会1985）。現在は山林である。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(6) **小久米B遺跡**（図版11の6，氷見市遺跡地図第2版36）氷見市小久米

本遺跡は上庄川左岸に位置する丘陵の斜面上に位置する。標高は約45～65ｍを測る。現在は水田として利用されている。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。（須田雅昭）

(7) **小久米番場谷内遺跡**（図版11の7，氷見市遺跡地図第2版34）氷見市小久米字番場谷内

本遺跡は上庄川上流左岸の丘陵の谷間に立地し，小久米集落の西約400ｍに所在する。小久米B古墳群と日名田古墳群の所在する丘陵にはさまれた谷にあたり，標高は約20ｍを測る。現在は水田として利用されている。現在までに須恵器，土師質骨甕などが採集され，奈良・平安・江戸時代の遺跡であることが確認されている（氷見市教育委員会 1993）。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(8) **日名田古墳群**（図版11の8，氷見市遺跡地図第2版175）氷見市日名田

本古墳群は上庄川上流左岸の丘陵の尾根部に立地し，谷をはさんだ東側には小久米B古墳群が所在する。標高は約20～40ｍを測る。円墳3基が確認されており，そのうちの1基は前方後円墳の可能性が指摘されている（氷見市教育委員会 1989）。現在は山林である。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(9) **小久米A遺跡**（図版11の9，氷見市遺跡地図第2版43）氷見市小久米字諏訪平

本遺跡は上庄川上流左岸の舌状丘陵に立地し，小久米集落の西約300ｍのところに所在する。標高は約30～40ｍを測る。縄文時代から平安時代までの複合遺跡として知られる。1984年に氷見市教育委員会により試掘調査され，土師器・須恵器・珠洲片が多数出土した。時期の推定できる遺物としては，複合口縁の甕があり，古墳時代初頭に比定される（氷見市教育委員会1984）。翌年の本調査では，住居址4棟，土坑4基，多数の柱穴が確認され，弥生時代終末期の集落の存在が明らかになった（氷見市教育委員会 1985）。現在は水田として利用されている。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(10) **小久米A古墳群**（図版11の10，氷見市遺跡地図第2版45）氷見市小久米

本古墳群は上庄川上流左岸の舌状丘陵の端に立地し，小久米集落の西約150ｍのところに所在する。東側には小久米A遺跡が隣接する。標高は約30～50ｍを測る。調査時の踏査により古墳が2基以上確認されているが，実態は不明である（氷見市教育委員会 1989）。現在は水田として利用されている。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(11) **小浦城（池田城）跡**（図版12の11，氷見市遺跡地図第2版46）氷見市小久米字池田

本城跡は久目と小久米の境をなす舌状丘陵の小山に立地する。標高約90.3mの最高点を中心に，郭・堀切・土橋が存在する。文献では，三善石見守朝宗が応安年間に築造し，天正年間までその子孫（小浦氏）が居住したと伝えられている。古代能越の重要幹線であった「之乎路」を眼下にとらえ，能登へ通じる街道の要衝であったとみられる（高岡 1990）。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(12) **久目千元遺跡**（図版12の12，氷見市遺跡地図第2版147）氷見市久目字千元

本遺跡は上庄川上流左岸の谷部に立地し，久目集落の北西約600mに所在する。標高は約25mを測る。古墳時代の遺跡として知られ，現在までに古墳時代の土師器高杯脚部が1片採集されている（大野 1990）。現在は水田として利用されている。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。（佐藤 慎）

(13) **久目子浦谷内遺跡**（図版12の13，氷見市遺跡地図第2版208）氷見市久目字子浦谷内

本遺跡は久目地区の北，上庄川中流域の左岸から西に約250m離れた山裾の平坦部に立地する。標高は約20mを測る。これまでの調査から珠洲甕の胴部破片，甕の口縁部破片がそれぞれ1片ずつ採集されている。口縁部破片は珠洲Ⅱ～Ⅲ期のものであり，本遺跡は13世紀頃に主体をもつものと考えられている（大野 1990）。現在は水田として利用されている。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(14) **久目梨谷古墳群**（図版12の14，氷見市遺跡地図第2版180）氷見市久目字梨谷

本古墳群は触坂地区の北，上庄川中流域の左岸になだらかに迫る丘陵の東側斜面裾部に立地し，標高は約45～70mを測る。現在は山林となっている。

古墳はこれまでに7基確認されており，6世紀頃のものと考えられる。4号墳が方墳である以外は全て円墳である（大野 1990）。今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(15) **久目梨谷遺跡**（図版12の15，氷見市遺跡地図第2版202）氷見市久目字梨谷

本遺跡は久目梨谷古墳群の西側の谷に立地し，標高は約23mを測る。これまでに採集された遺物は，珠洲甕の口縁部1片であり，珠洲Ⅲ期（13世紀後半）のものである。現在は住宅地として利用されている。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(16) **久目大町遺跡**（図版12の16，氷見市遺跡地図第2版205）氷見市久目字大町

本遺跡は久目覚地遺跡の東北，上庄川中流域の右岸の平坦部に立地し，標高は約20mをはかる。これまでに採集された遺物は，須恵器1片，珠洲1片である。須恵器は7世紀末～9世紀前半の外面に平行線文，内面に同心円文を有する甕の胴部片であり，色調は暗青灰色を呈する。珠洲は底径約8.8cmを測る壺の底部片であり，色調は青灰色を呈する（大野 1990）。現在は水田として利用されている。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(17) **久目桑の木遺跡**（図版12の17，氷見市遺跡地図第2版207）氷見市久目字桑の木

本遺跡は久目集落の西，上庄川中流域の左岸の平坦部に位置し，標高は約20ｍを測る。現在は水田として利用されている。これまでの調査では須恵器杯Ｂ１片，珠洲片口鉢，壺がそれぞれ１片ずつ採集されている。このことから遺跡は８世紀及び，12世紀後半～16世紀前半のものと考えられている（大野 1990）。

今回の調査では，遺物は採集されなかった。（戸簾暢宏）

(18) 久目トリノマエ遺跡（図版12の18，氷見市遺跡地図第２版167）氷見市久目字トリノマエ

本遺跡は上庄川の中流域北岸，久目集落の北側に所在し，標高は約20ｍを測る。現在は水田として利用されている。過去に古代の須恵器２片，珠洲２片が出土している。これらの遺物より，８世紀代から中世の遺跡と比定されている（大野 1990）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(19) 久目安楽寺遺跡（図版12の19，氷見市遺跡地図第２版157）氷見市久目字安楽寺

本遺跡は上庄川の中流域右岸，久目神社の北側に所在し，標高は約25ｍを測る。現在は水田として利用されている。過去に古代の須恵器７片が出土している。これらの遺物から８世紀後半の遺跡と比定されている（大野 1990）。現在は水田として使用されている。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(20) 久目ゾウダナ遺跡（図版12の20，氷見市遺跡地図第２版206）氷見市久目字ゾウダナ

本遺跡は上庄川の中流域右岸，光臨寺の北側，久目集落のほぼ中央に所在する。過去に古代の須恵器５片が出土している。これらの遺物から６世紀末から８世紀後半頃の遺跡と比定されている（大野 1990）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(21) 早借ヤワタ古墳群（図版11，12の21，氷見市遺跡地図第２版165）氷見市早借

本遺跡は，早借八幡宮から南の尾根上約700ｍの範囲にわたり，標高は約32.5～93ｍを測る。これまでに方墳８基，円墳３基が確認されている（氷見市教育委員会 1989）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(22) 早借サカタ遺跡（図版12の22，氷見市遺跡地図第２版193）氷見市早借

本遺跡は，上庄川の中流域南岸，早借川をまたぐ両岸に所在する。標高は約10ｍを測る。過去に土師器が採集されているが，時代など詳細は不明である。

今回の調査では遺物を採集できなかった。（高安洋治）

(23) 新保横穴群（図版11，14の23，氷見市遺跡地図第２版131）氷見市新保字後山

本遺跡は上庄川の中流右岸，後山の東側丘陵地帯に位置する。標高は約40～50ｍを測る。1927年湊嘉平次氏により，調査発見された。横穴は，現在までに２基確認されており，２基とも後山の東方に面し，東北東に向かって開口している。２基の間は約50ｍ離れており，何れも粘土質の地層にある。２基ともに遺物等は見つかっていない（林 1930）。現在は，山林として利用されている。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(24) 谷屋A遺跡（図版11の24，氷見市遺跡地図第2版35）氷見市谷屋

本遺跡は上庄川の中流左岸，谷屋集落北側の丘陵地帯裾野に位置する。標高は約40mを測る。古代の遺跡として知られているが，詳細は判っていない（氷見市教育委員会 1993）。現在は，山林である。

今回の調査では遺物を採集できなかった。（早川さやか）

(25) 新保城跡（図版11の25，氷見市遺跡地図第2版121）氷見市新保城ヶ峯

本城跡は上庄川支流の論田川右岸の丘陵に位置する。論田川に沿った標高30m前後の細長い丘陵尾根に堀切が確認されているが，城全体の詳細は不明である。伝承では，この背後の山中に本城があるという。

今回の調査を含めて，遺物は確認されていない。（大野 究）

(26) 中村粟屋古墳群（図版13の26，氷見市遺跡地図第2版90）氷見市中村字粟屋

本古墳群は上庄川の中流左岸，中村地区北側丘陵地帯に位置する。標高は約20～70mを測る。周囲には，谷屋B遺跡・谷屋C遺跡が存在する。現在のところ6基以上の古墳を確認している（氷見市教育委員会 1993）。現在は山林である。

今回の調査では遺物を採集できなかった。（早川さやか）

(27) 谷屋B遺跡（図版13の27，氷見市遺跡地図第2版91）氷見市谷屋

本遺跡は上庄川河口から約6㎞遡った平野部の北側にある丘陵の斜面端部付近に立地する。標高は約50～60mを測る。東西約100m，南北約160mにわたって分布しており，中村粟屋古墳群の分布域とも重なる。従来より古墳時代の遺跡として知られ，土師器・須恵器・子持勾玉が採集されている（西井 1971）。現在は山林及び畑として利用されている。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(28) 谷屋C遺跡（図版13の28，氷見市遺跡地図第2版141）氷見市谷屋

本遺跡は上庄川河口から約6㎞遡った平野部の北側にある丘陵の裾部に立地する。標高は約17m～約25mを測る。東西約120m，南北約190mにわたって分布し，背後の丘陵には中村粟屋古墳群が所在する。従来より奈良時代の遺跡として知られ，須恵器が採集されている。現在は水田・畑・山林として利用されている。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(29) 中村天場山古墳（図版13の29，氷見市遺跡地図第2版37）氷見市中村字天場山

本古墳は，中村地区は上庄川によってつくられた谷地形の中でも両岸の山と山との間隔が広くなって平野部となっている所に所在し，この平野部のほぼ中央にある独立丘陵の西端に立地する。標高は約25mを測る。従来は前方後方墳と考えられていたが，1993年に氷見市教育委員会が中心になり，測量調査が行われた結果，立地・周囲の古墳群との関連・墳丘の形などから古墳時代前期の前方後円墳であると推定されている（氷見市教育委員会 1993）。

今回の調査を含めて，遺物は確認されていない。　（滝川邦彦）

(30) **中村城跡**（図版13の30，氷見市遺跡地図第２版33）氷見市中村字栗屋山

本城跡は，上庄川中流左岸に広がる平野北側の丘陵上に位置する。標高約70ｍの地点を最高に，東西約200ｍ，南北約200ｍの範囲で縄張りが確認されている。平野との比高は約60ｍである。主郭は尾根筋を削平した長さ約110ｍ，幅約15ｍの細長いものであり，途中堀切と土橋によって二分されている。主郭の周囲はいずれも堀切によって遮断され，東西の堀切には土橋が設けられている。

『古城考五種』（金沢市立玉川図書館加越能文庫蔵）の『三箇国古城』に，「中村　長尾左馬助」とあるが，詳細は不明である。

今回の調査を含めて，遺物は確認されていない。

(31) **中村横穴群**（図版13の31，氷見市遺跡地図第２版177）氷見市中村字栗屋山

本遺跡は，中村城の立地する丘陵の南側斜面に位置する。３基の横穴が開口すると伝えられるが，詳細は不明である。

今回の調査を含めて，遺物は確認されていない。　（大野　究）

(32) **柿谷椎木出遺跡**（図版13の32，氷見市遺跡地図第２版156）氷見市柿谷

本遺跡は柿谷集落北側の谷に立地する。標高は約20ｍを測る。約240×100ｍの範囲でこれまでに鉄滓が採集されているが，詳細は不明である。現在は水田及び畑として利用されている。

今回の調査では遺物は採集できなかった。

(33) **速川神社古墳群**（図版11.14の33，氷見市遺跡地図第２版164）氷見市新保・早借

本古墳群は，上庄川中流付近の上庄川右岸にある丘陵から北北西に向かって伸びている尾根の稜線に沿って立地している。標高は約60ｍ～90ｍを測る。方墳４基，円墳４基が確認されており，分布域の中心には速川神社がある。現在は神社の境内及び山林として利用されている。詳細は不明である。

今回の調査では遺物は採集できなかった。　（滝川邦彦）

(34) **滝尾山遺跡**（図版11の34，14の34，氷見市遺跡地図第２版213）氷見市早借

上庄川の河口から約6.5㎞遡った地点より南方約１㎞の所に早借集落がある。本遺跡はこの集落の東側の丘陵の斜面に立地し，速川神社より南，聞行寺より北の一帯に位置する。東西約600ｍ，南北約750ｍにわたって広がる。標高は約30～140ｍを測る。中世の寺院跡と推定され，土師器や珠洲が採集されている。現在は水田や畑に利用されている。

今回の調査では遺物は確認できなかった。

(35) **イヨダノヤマ古墳群**（図版14の35，氷見市遺跡地図第２版172）氷見市上田

本古墳群は，上庄川の右岸の丘陵尾根に位置し，西には新保横穴群，速川神社古墳群が広がる。標高は約60ｍを測る。約12基の円墳と方墳とで構成される。うち，３号墳が1993年に発掘調査されている。当古墳は，直径約23ｍ，高さ約２ｍの円墳で，割竹形木棺が検出されている。

出土遺物としては，横矧板鋲留短甲１具，直刀２振，鉄鏃約20個，鉄鉾１振，須恵器（蓋杯，𤭯，甕），土師器高杯，滑石製紡錘車がある。出土遺物から古墳の築造時期は，古墳時代中期後葉（５世紀中葉）と考えられる（大野 1994）。

今回の調査では遺物は確認できなかった。

(36) **上田（うわだ）Ｃ遺跡**（図版14の36，氷見市遺跡地図第２版221）氷見市上田

上庄川の河口から約５㎞遡った地点より南方約500ｍの所に上田集落がある。本遺跡はこの集落の西側丘陵の斜面から平端部に位置し，東には標高137.4ｍの千久里山を望む。東西約500ｍ，南北約250ｍにわたって広がる。標高は約30～55ｍを測る。今までに土器が採集されているが，詳細は不明である。現在は水田に利用されている。

今回の調査では遺物は確認できなかった。

(37) **上田（うわだ）Ｄ遺跡**（図版14の37，氷見市遺跡地図第２版222）氷見市上田

本遺跡は，上田Ｃ遺跡から南東に約200ｍの東西に延びる丘陵尾根一帯に位置する。南東の麓には，玄正寺が位置する。東西約600ｍ，南北約250ｍにわたって広がる。標高は約30～50ｍを測る。古墳時代の遺跡であるが詳細は不明である。

今回の調査では遺物は確認できなかった。

(38) **上田（うわだ）Ｅ遺跡**（図版14の38，氷見市遺跡地図第２版223）氷見市上田

主要地方道万尾・宇波線を国道415号線との交差点から南南西に約1.8㎞進んだところに西に延びる支谷がある。その支谷の中に本遺跡は位置し，径約100ｍの範囲に広がる。標高は約20ｍを測る。今までに土器が採集されているが，詳細は不明である。現在は水田に利用されている。

今回の調査では遺物は確認できなかった。（岡田一広）

(39) **上田南儀（うわだなんぎ）遺跡**（図版14の39，氷見市遺跡地図第２版212）氷見市上田

本遺跡は竹里山の西裾部に広がる平坦地に立地し，上田集落の西方に所在する。標高は約30ｍを測る。過去に，縄文土器，古代の土師器，須恵器が出土したとされているが，詳細は不明である。現在は竹林・畑などに利用されている。

今回の調査では，石製品１片，須恵器13片，土師器２片，越中瀬戸１片，近世陶磁１片，時期不明土器１片を採集したが，小破片のため図示できなかった。しかし，近世の遺物が採集されたことによって，本遺跡が縄文時代・古代及び近世の遺跡であることが明らかになった。

(40) **高松（たかまつ）城跡**（図版14の40，氷見市遺跡地図第２版186）氷見市粟原・上田

本遺跡は粟原から早借へ抜ける道の東方にそびえる。標高約154.5ｍの高松山の山上を中心に所在する。この城の東南には，約2.3㎞を隔てて久津呂城，また北東約1.8㎞に千久里城，西方約2.7㎞に池田城がある。主郭と思われる山頂部は約70×40ｍのなだらかな平坦面となっている。

伝承によると，天正年間，小浦石見守の家臣高松右衛門が居城した城であり，西方約2.7㎞にある池田城の東の出城としての役割を果たしていたとされている（高岡 1990）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(41) **老谷滝の上遺跡**（図版15の41，氷見市遺跡地図第２版198）氷見市老谷字滝の上

本遺跡は石川県との境をなす尾根近くの丘陵斜面に立地し，老谷集落の南西約100ｍに所在する。標高は約155ｍを測る。以前の調査では，縄文時代中期後葉の古串田新式に比定できる縄文土器が採集されている（大野 1990）。現在は水田及び溜池として利用されている。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(42) **老谷遺跡**（図版15の42，氷見市遺跡地図第２版199）氷見市老谷

本遺跡は老谷集落の北西の丘陵斜面に所在する。標高は約155ｍを測る。以前の調査では，中世の館跡と思われる遺構，土塁が確認されているが，詳細は不明である。現在は水田及び溜池として利用されている。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(43) **見内モリヒサ遺跡**（図版12の43，氷見市遺跡地図第２版201）氷見市見内字モリヒサ

本遺跡は上庄川左岸の小さな谷の入口に立地し，見内集落の北東に所在する。標高は約22ｍを測る。過去に縄文土器が出土したとされているが，詳細は不明である（大野 1990）。現在は水田・宅地として利用されている。

今回の調査では遺物を採集できなかった。　（中野秀昭）

(44) **久目経塚**（図版12の44，氷見市遺跡地図第２版69）氷見市触坂

上庄川左岸の丘陵の南斜面に所在するとされているが，時期など詳細は不明である（大野 1990）。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(45) **久目覚地遺跡**（図版12の45，氷見市遺跡地図第２版146）氷見市久目覚地

本遺跡は上庄川右岸の平坦部に立地し，標高は約22ｍを測る。これまでに採集されている遺物は，須恵器の壺１片であり，古代の遺跡と考えられている（大野 1990）。現在は水田として利用されている。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(46) **久目浄仙遺跡**（図版12の46，氷見市遺跡地図第２版170）氷見市久目字浄仙

本遺跡は上庄川右岸の平坦部に立地し，久目集落と触坂集落の間に位置する。標高は約23ｍを測る。これまでに採集されている遺物は珠洲の片口鉢１片である（大野 1990）。現在は水田として利用されている。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(47) **久目朴木遺跡**（図版12の47，氷見市遺跡地図第２版203）氷見市久目字朴木

本遺跡は上庄川右岸の谷の入口から約250ｍの所に立地し，久目集落の南端に所在する。標高は約26ｍを測る。これまでに採集されている遺物は土師器１片，須恵器１片，珠洲５片，計７片である。古代・中世の遺跡と考えられている（大野 1990）。現在は宅地として利用されている。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(48) **久目大坪遺跡**（図版12の48，氷見市遺跡地図第２版204）氷見市久目大坪

本遺跡は上庄川右岸の谷の入口付近に立地し，標高は約26ｍを測る。これまで確認されている遺物が近世の越中瀬戸の皿１片であるため，詳細は不明である（大野 1990）。現在は水田として利用されている。

今回の調査では遺物を採集できなかった。（西村倫子）

(49) **堂谷山古墳**（図版12の49，氷見市遺跡地図第２版149）氷見市触坂字堂谷山

本古墳は桑院川右岸の丘陵上に立地する。触坂集落の東に所在し，標高は約80ｍを測る。径約30ｍの円墳である（大野 1990）。現在は山林である。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(50) **触坂広瀬遺跡**（図版12の50，氷見市遺跡地図第２版148）氷見市触坂字広瀬

本遺跡は桑院川が上庄川と合流する谷の出口の微高地に立地し，触坂集落のほぼ中央に所在する。標高は約30ｍを測る。採集されている遺物から，縄文，古墳，古代の遺跡であることが確認されている（大野 1990）。現在は水田として利用されている。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(51) **桑院吉谷遺跡**（図版12の51，氷見市遺跡地図第２版68）氷見市桑院字吉谷

本遺跡は桑院川の左岸，細長い丘陵の上に立地し，現在の桑院集落の西側に所在する。標高は約55ｍを測る。現在は水田として利用されている。これまでに縄文土器103片，石器５点などが採集されている。縄文土器は中期後葉串田新Ⅰ・Ⅱ式，後期前葉前田式期に比定されている（大野 1990）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(52) **桑院金山遺跡**（図版12の52，氷見市遺跡地図第２版155）氷見市桑院字金山

当遺跡は桑院と鉾根の境をなす丘陵尾根の近くに所在し，標高は約135ｍを測る。児島清文氏によれば過去に鉄滓を採集したというが，詳細は不明である（大野 1990）。現在は山林である。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(53) **御林山城跡**（鞍骨山城跡）（図版16の53，氷見市遺跡地図第２版127）氷見市桑院通称御林山

本城跡は桑院と鉾根の境をなす通称御林山に所在し，標高は約237ｍを測る。城跡頂上を中心に，郭，堀切が確認できる。また主郭と推測される平坦地には，径２ｍ前後の塚が２基所在する（大野 1990）。

今回の調査も含めて，遺物は確認されていない。（塚田和也）

(54) **岩瀬番畑遺跡**（図版15の54，氷見市遺跡地図第２版196）氷見市岩瀬字番畑

本遺跡は上庄川左岸の丘陵先端部とその周辺に立地し，岩瀬集落の南側，上庄川沿いの道と

峠を越えて石川県志雄町に向う道との分岐点であり，岩瀬谷内の前遺跡の北約300ｍに所在する。標高は約50ｍを測る。これまでに採集されている遺物は石器２点・石器未製品４点・剥片139片，計145片である（大野 1990）。現在は畑地・宅地として利用されている。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(55) **岩瀬谷内の前遺跡**（図版15の55，氷見市遺跡地図第２版197）氷見市岩瀬字谷内の前

本遺跡は上庄川右岸に立地し，岩瀬集落と棚懸集落の境近くに所在する。標高は約50ｍを測る。これまでに縄文土器が出土したといわれているが，詳細は不明である（大野 1990）。現在は畑地として利用されている。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(56) **一の島城跡**（岩瀬城跡・城ヶ峰城跡）（図版15の56，氷見市遺跡地図第２版176）氷見市棚懸

本城跡は富山県と石川県の境の尾根上に立地する，標高約262ｍの山上に築かれた山城である。この山は地元で「城ヶ峰」と呼ばれ，以前から城跡であることが認識されている。しかし，過去の記録や伝承がなく詳細は不明である。当城は南西から北東に向けて伸びた尾根上に郭を点々と配し，個々の郭を堀切や段差などによって守ったもので，主郭と推測する平坦地には，径２ｍ前後の塚が２基所在する（大野 1990・高岡 1990）。

今回の調査も含めて，遺物は確認されていない。

(57) **坪池白坂遺跡**（図版17の57，氷見市遺跡地図第２版227）氷見市坪池

本遺跡は上庄川上流の山間部に立地し，標高は約240ｍを測る。赤毛小学校の北約200ｍに所在する。これまでに縄文時代の土器・石器が多数採集されている。また採集された遺物の中には旧石器時代に所属する可能性のある剥片が含まれていることから，本遺跡周辺は氷見市域で未確認の旧石器時代の遺跡立地の有力な候補地とされている（大野 1992）。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(58) **土倉ゴマジマチ遺跡**（図版17の58，氷見市遺跡地図第２版200）氷見市赤毛字ゴマジマチ

本遺跡は上庄川上流の丘陵斜面に立地し，土倉集落の南西に所在する。標高は約265ｍを測る。これまでに採集されている遺物は，縄文時代の石器２点である（大野 1990）。現在は水田として利用されている。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。（中島和哉）

(59) **土倉稲村遺跡**（図版17の59，氷見市遺跡地図第２版159）氷見市赤毛（土倉）字稲村

本遺跡は上庄川上流の丘陵尾根に立地し，土倉集落の南東に所在する。標高は約220ｍを測る。現在までに採集されている遺物は，縄文時代の定角式磨製石斧２点（共に砂岩製）である（大野 1990）。現在は水田・山林となっている。

今回の調査では遺物は採集できなかった。

(60) **坪池シャンドン遺跡**（図版17の60）氷見市坪池

本遺跡は，坪池集落と土倉集落の中ほどにある「シャンドン」と呼ばれる小高い山の山頂に立地する。標高は約250ｍを測る。山頂の中央には，氷見市の指定文化財となっている宝篋印塔が１基ある。この塔は直径４ｍほどのマウンド状の盛土の最頂部に，自然石を敷いて建っている。高さは約1.16ｍと小振りではあるが，墓壇・塔身・笠・相輪が揃っている。また，盛土や台座の自然石などから，建立時の位置から動いてはいないようである。塔身は底辺約23㎝，高さ約21㎝のほぼ立方体であり，反花座の上に如来像を厚肉彫し，左右の側面には梵字を陰刻している（氷見市教育委員会 1993）。

今回の調査では遺物は採集できなかった。

(61) 日詰（ひづめ）コブクロ遺跡（図版11の61）氷見市日詰

今回の調査によって新たに発見した遺跡である。本遺跡は，上庄川上流の東側の平野上に立地し，背後には早借ヤワタ古墳群がある小丘陵の裾が迫っている。標高は約17ｍを測る。現在は水田として利用されている。

今回の調査では，須恵器２片を採集し，その内１片を図示した（図版３の３）。

３は，須恵器有台杯の底部であり，９世紀後半のものである。底径は約８㎝を測る。胎土はやや密であり，色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

また，以下の土師器２片は，氷見市日詰在住の坂下 富氏が1960年に本遺跡の範囲内で採集されたもので，今回ご提供頂いたものである（図版３の４・５）。

４は土師器壺の口頸部であり，４世紀前半のものである。口径は約13.5㎝を測る。全体的に摩耗を受けているため明確ではないが，外面の一部には横撫で調整，頸部内面には刷毛目調整が確認できる。胎土はやや密であり，色調は橙赤色を呈する。焼成はやや不良である。

５は土師器高杯の脚部であり，４世紀前半のものである。底径は約11㎝を測る。全体的に摩耗を受けているため明確ではないが，脚裾部には横撫で調整，脚部の一部には刷毛目調整が確認できる。脚部上端部には円板充填の痕跡が認められる。胎土は密であり，色調は浅橙色を呈する。焼成はやや良好である。

(62) 熊無（くまなし）遺跡（図版18の62）氷見市熊無

今回の調査によって新たに発見した遺跡である。本遺跡は，熊無地区の十柱神社から北に約600ｍの所に位置する独立丘陵状の尾根上に立地する。標高は約136ｍを測る。現在は山林となっているが，一部は墓地として利用されている。

今回の調査では，一石一尊仏を含む集石遺構３ヶ所と，その付近に散布していた多量の珠洲破片を確認した。今回は主要なもののみを採集し，６片を図示した（図版３・４の６～11）。

６は珠洲甕の底部であり，珠洲Ⅴ期（15世紀頃）のものである。底径は約20㎝を測る。外面には平行叩目を施し，３㎝幅に８条ある。胎土はやや粗く，色調は青灰色を呈する。焼成はやや不良である。

７は珠洲甕であり，珠洲Ⅰ～Ⅲ期（12～13世紀頃）のものである。外面には綾杉叩目を施し，

3㎝幅に12条ある。内面には当具痕が確認できる。胎土は密であり，色調はオリーブ灰色を呈する。焼成は良好である。

8は珠洲甕であり，珠洲Ⅴ期（15世紀頃）のものである。外面には平行叩目を施し，3㎝幅に6条ある。胎土はやや粗であり，色調は灰オリーブ色を呈する。焼成は不良である。

9は珠洲壺の底部であり，時期は不明である。底径は約11㎝を測る。内外面共に回転撫で調整を施しているが，破片上部にはかすかに叩目が確認できる。胎土は密であり，色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

10は珠洲壺の底部であり，時期は不明である。底径は約11㎝を測る。内外面共に回転撫で調整を施しているが，破片上部にはかすかに叩目と当具痕が確認できる。胎土は密であり，色調は灰色を呈する。焼成は良好である。9と同一個体である可能性がある。

11は珠洲すり鉢の口縁部であり，珠洲Ⅳ期初め（14世紀頃）のものである。口径は約32㎝を測る。内外面共に回転撫で調整を施し，内面下半部には卸目が確認できる。胎土は粗く，色調は灰白色を呈する。焼成は不良である。

なお，今回の調査後，氷見市教育委員会の調査によって

- 集石遺構が尾根上全体（約50m）にわたって10ヶ所以上も直線的に存在すること
- 集石遺構には，一石一尊仏の他に五輪塔や板石塔婆もふくまれていること
- 周囲には火葬骨も散乱していたこと

などが明らかになり，これが中世墓地であることが判明した。

(63) 上田(うわだ)G遺跡（図版14の63）氷見市上田

今回の調査によって新たに発見した遺跡である。本遺跡は，明治43年に現在の上田神社に合祀された日吉社の跡地に立地する。北西約200mには上田E遺跡がある。標高は約16mを測る。現在は水田として利用されている。

今回の調査では，一石一尊仏と五輪塔を確認，土師器1片，珠洲2片，越中瀬戸1片を採集し，その内2片を図示した（図版4の12・13）。

12は珠洲甕であり，時期は不明である。外面には平行叩目を施し，3㎝幅に10条ある。胎土はやや粗く，色調は灰色を呈する。焼成はやや不良である。

13は越中瀬戸の小皿である。口径は約9㎝，底径は約3.6㎝，器高は約2.8㎝を測る。内面全体と外面上半に薄い鉄釉を施す。胎土はやや密であり，色調は浅黄橙色を呈する。釉調は暗褐色で，焼成は良好である。（三浦知徳）

(64) その他の採集遺物

本調査では，遺跡として設定した地区外の採集品についても，将来的な遺跡発見の可能性を高めるため，すべて採集地点を記録・報告している（図版11～19）。これらの内，主なものについて示す（図版5の14～26）。

14は須恵器の壺・甕類の体部である。胎土は密であり，1～2㎜の砂礫を含んでいる。色調

は青灰色を呈し，焼成は良好である。内面は同心円状の当具痕が木目を切るかたちではいり，外面にはカキ目を有する（x＝－22.5，y＝93)。

15は須恵器の甕の体部であり，9世紀頃のものである。外面に叩目を施す。胎土は密であり，色調は青灰色を呈す。焼成は良好であり，還元硬質である（x＝－22，y＝95.5)。

16は須恵器の杯の口縁部である。口径は約14cmを測る。胎土はやや密であり，青灰色を呈する。焼成は還元硬質である（x＝－21，y＝94)。（戸簾暢宏)

17は珠洲である。外面に平行叩き目が施されている。年代は不明である。胎土は密である。色調は灰色を呈し，焼成は良好である（x＝－22.5，y＝94.5)。

18は珠洲壺甕である。外面に叩き目が施されている。年代は不明である。胎土はやや密であり，2mm程の白砂を含む。色調は灰色を呈し，焼成は良好である（x＝－20.5，y＝97)。

（高安洋治)

19は珠洲のすり鉢の底部であり，珠洲V期のものである。底径は約11.6cmを測る。内面には卸目を施し，外面は撫で調整を施す。底部には静止ヘラ切り痕がある。胎土はやや粗であり，礫が混ざる。色調は青灰色を呈す。焼成は良好である（x＝－24.5，y＝97.5)。

20は越中瀬戸の骨壺蓋の口縁部である。口径は約12cmを測る。内面・外面ともに撫で調整を施す。胎土はやや密であり，色調は浅黄色を呈する。焼成は良好である（x＝－21，y＝94)。

（滝川邦彦)

21は越中瀬戸の骨壺の蓋である。口径は約7.5cmを測る。釉薬はかかっておらず，浅黄橙色を呈する。胎土は密であり，焼成は良好である（x＝－21，y＝94)。（戸簾暢宏)

22は越中瀬戸の無釉骨壺である。胎土は砂粒を多く含み，黄褐色を呈す。焼成は良好である。外面に文字を記しているが，一部分のため判読できない（x＝－21，y＝94)。（岡田一広)

23は肥前系磁器の皿の口縁部である。18世紀半ば～19世紀のものであり，口径は約11cmを測る。内面に蛸唐草文様を施している。胎土は密であり，焼成は良好である（x＝－20.5，y＝93.5)。

24は近世磁器の碗の口縁部である。17世紀末～18世紀半ばのものであり，口径は15cmを測る。胎土はやや密であり，焼成は極めて良好である（x＝－24，y＝93)。（中野秀昭)

25は伊万里の碗である。底径は約4cmを測る。胎土は密で，白色を呈す。焼成は良好である（x＝－25，y＝93)。（岡田一広)

26は近世磁器の皿の底部である。17世紀末～18世紀半ばのものであり，底径は約8cmを測る。胎土は緻密であり，焼成は極めて良好である（x＝－24，y＝94)。（中野秀昭)

(65) 中村川田地区採集遺物

ここに紹介する資料は，氷見市中村在住で，市文化財審議委員でもある橋本芳雄氏から氷見市立博物館が寄託を受けている考古資料のうち，本年度の調査地区に関連するものを抽出し，図化したものである。採集地は中村の通称川田地区である。資料は，長年教員をつとめられた

橋本氏の元に地元の人から寄せられたものであり，採集者・採集年月日の記録はないが，参考資料として掲載するものである（図版６の27～33）。

27は須恵器杯の底部である。８世紀頃のものであり，底径は約９㎝を測る。胎土は密であり，外面は青灰色，内面は褐灰色を呈する。焼成はやや良である。（中島和哉）

28は須恵器の杯である。口径は約11.8㎝，底径約7.5㎝，器高約3.2㎝を測る。内外面共に轆轤撫で調整を施し，底部はヘラ切り後，撫で調整を施す。底部外面にはヘラにより十字が施されている。胎土は密であり，青灰色を呈する。焼成は良好である。（須田雅昭）

29は須恵器有台杯であり，８世紀頃のものである。口径は約11㎝，底径は約5.5㎝，器高は約4.8㎝を測る。胎土は砂礫を含み，色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。（三浦知徳）

30は珠洲の甕である。胎土は密であり，焼成は良好である。（須田雅昭）

31は珠洲壺の底部であり，14世紀頃のものである。外面と内面に回転撫でが施されており，底面に糸切り痕がある。胎土は密であり，灰色を呈する。焼成は良好であり，底径は約10㎝を測る。（中島和哉）

32は珠洲の甕の体部である。珠洲Ⅳ期（14世紀）のものである。胎土は密であり，灰色を呈する。焼成は還元硬質である。内面に当具痕があり，外面には綾杉の叩き目を施している。

33は珠洲の甕の口縁部である。口径は約42.8㎝を測る。珠洲Ⅱ期（13世紀）のものである。胎土は密だが，やや砂粒を多く含む。灰色を呈し，焼成は良好である。内面，外面ともに轆轤撫で調整を施している。（戸簾暢宏）

2　遺物の散布状態

本年度はD地区において古代から近世に至る91破片・口縁部1.04個体分の遺物を採集した。その遺跡・採集地点毎の詳細は，前節において述べている。

本節ではこれらの採集資料を歴史資料として活用するために，時期別に大別・計算し，その散布状態の傾向について示すことにする。なお，時期別の総量は，古代が22片・0.183個体分，中世が12片・0.075個体分，近世が44片・0.718個体分である。また時期不明とした遺物の中には，古墳から古代に属する須恵器（4片・0.05個体分）と，縄文土器1片，土師器2片，鉄製品1点，石製品2点などが含まれる。

なお本年度調査地区は氷見市の南西部にあたり，上庄川中流の開析谷と，上庄川上流及び支流である論田川流域の丘陵部からなる。

なお地区割りは氷見市都市計画座標に合わせて国土座標X＝138°59′55″，Y＝35°48′を原点とする1辺500mの方眼を設定し，その南西角の座標を地区名としている。

(1)　古代遺物の散布状態（第5図）

古代の遺物は，須恵器22片・0.183個体分を7地区から採集した。年代的には，8世紀代から資料の増加が顕著となり，9世紀がピークである。

この時期は上庄川中流にそって広がる丘陵裾部・平野部（小久米地区）に遺物が散布し，（x＝−21，y＝97.5）地区を中心とする上田C遺跡・上田D遺跡・上田E遺跡・上田南儀遺跡において15片と，比較的多くの遺物を採集している。

(2)　中世遺物の散布状態（第6図）

中世の遺物は，珠洲11片・0.075個体分，土師器1片を6地区から採集した。

D地区の中世遺跡は平野部，丘陵部どちらにも広がっているが，今回の調査では平野部から採集された遺物は殆どなく，寺院や墓，城跡がある丘陵部の遺跡近くから採集したものが多い。特に新たに発見した（x＝−24，y＝97.5）地区を中心とする熊無遺跡では6片の珠洲を採集している。

この時期の特徴は，採集遺物は12片と少ないが広範囲に分布していることである。

(3)　近世遺物の散布状態（第7図）

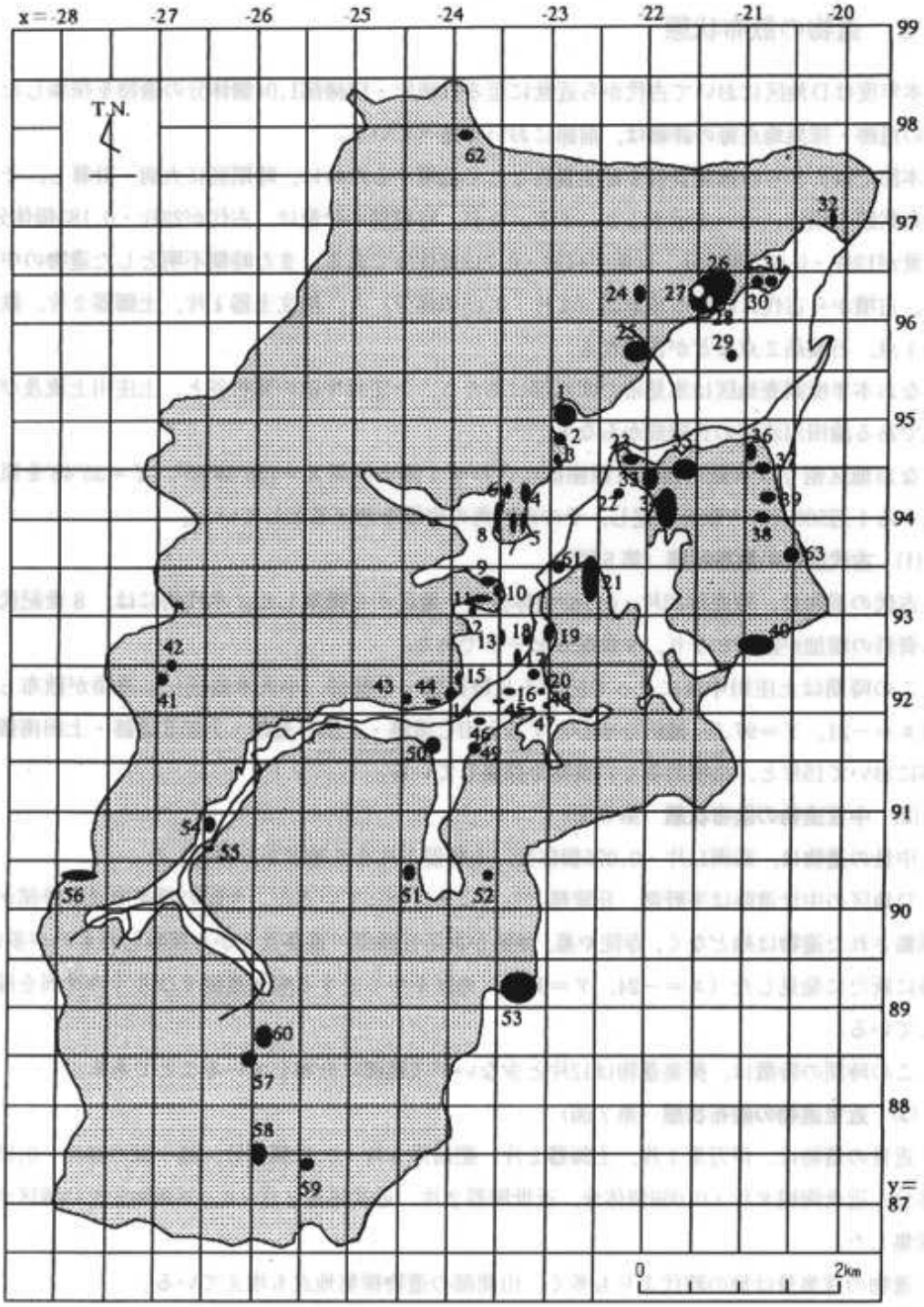
近世の遺物は，伊万里1片，土師器2片，肥前系3片・0.11個体分，越中瀬戸26片・0.55個体分，近世陶磁8片・0.058個体分，近世陶器2片，近世磁器2片・0.058個体分を13地区から採集した。

遺物の採集量は他の時代よりも多く，山間部の遺物採集地点も増えている。

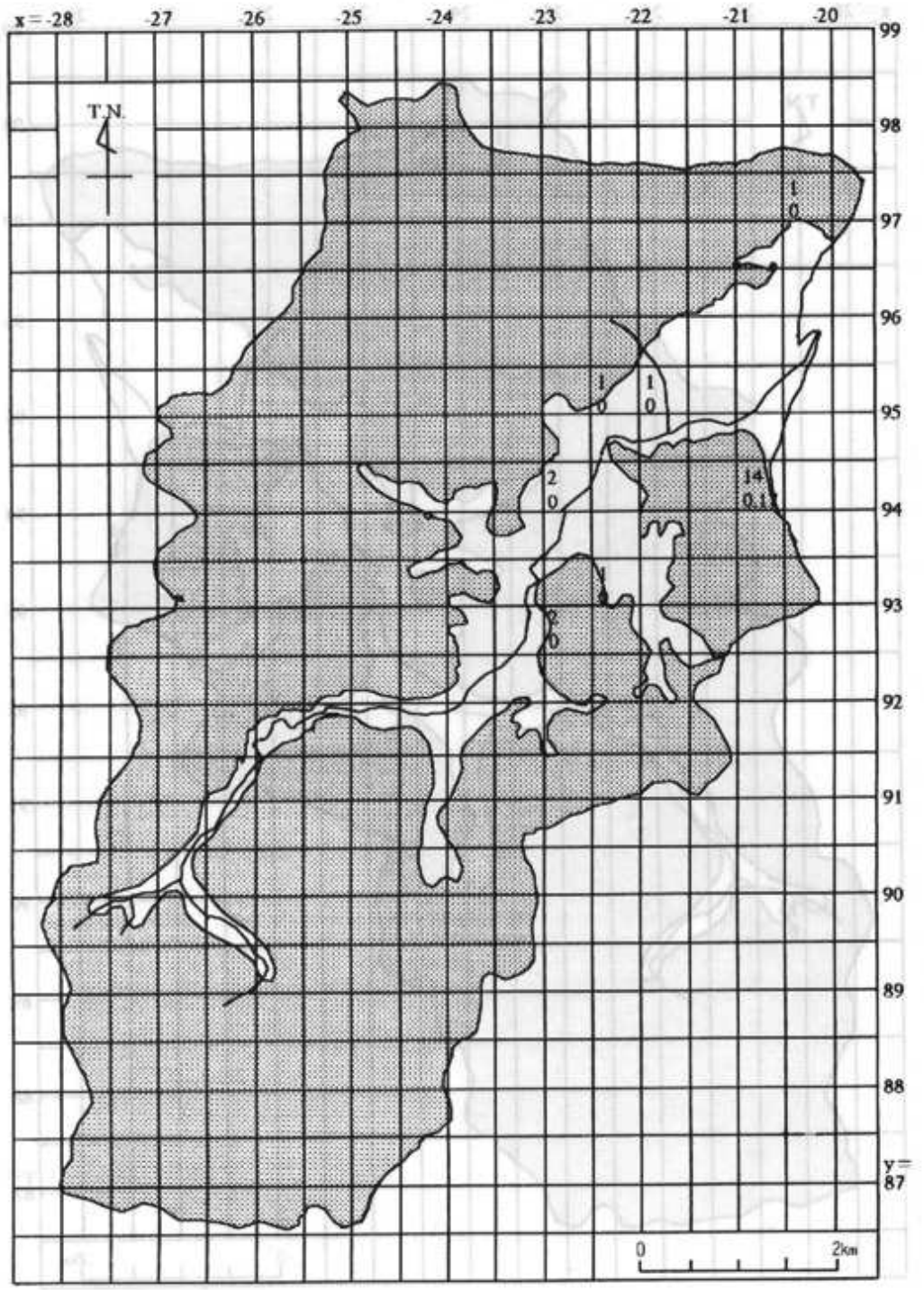
(4)　小　　結

各時期の遺物の散布状態は以上の通りであり，まとめると以下のようになるであろう。

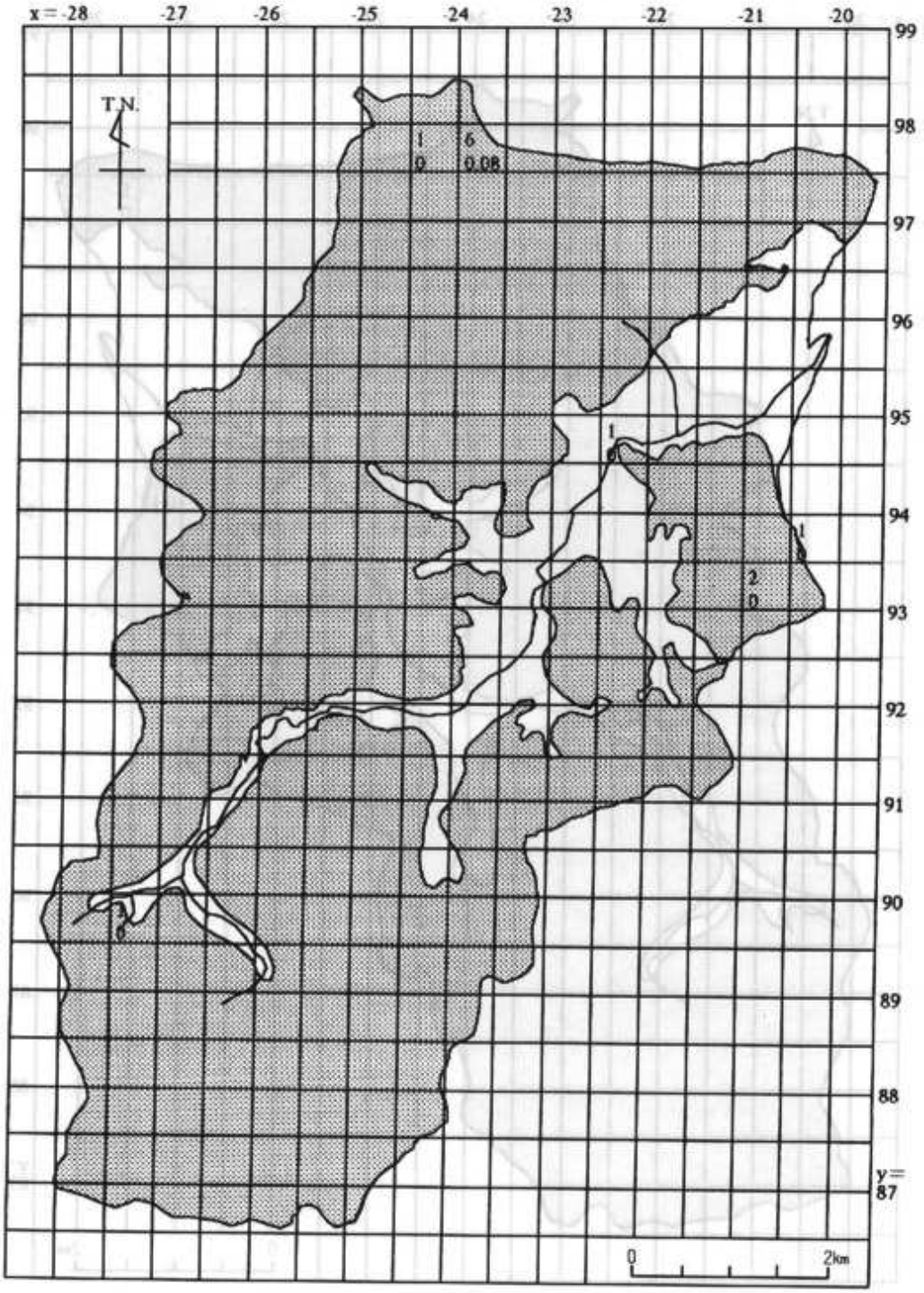
縄文時代の遺物は今回採集できなかったが，海進期には海岸線が丘陵部近くまでせまってい



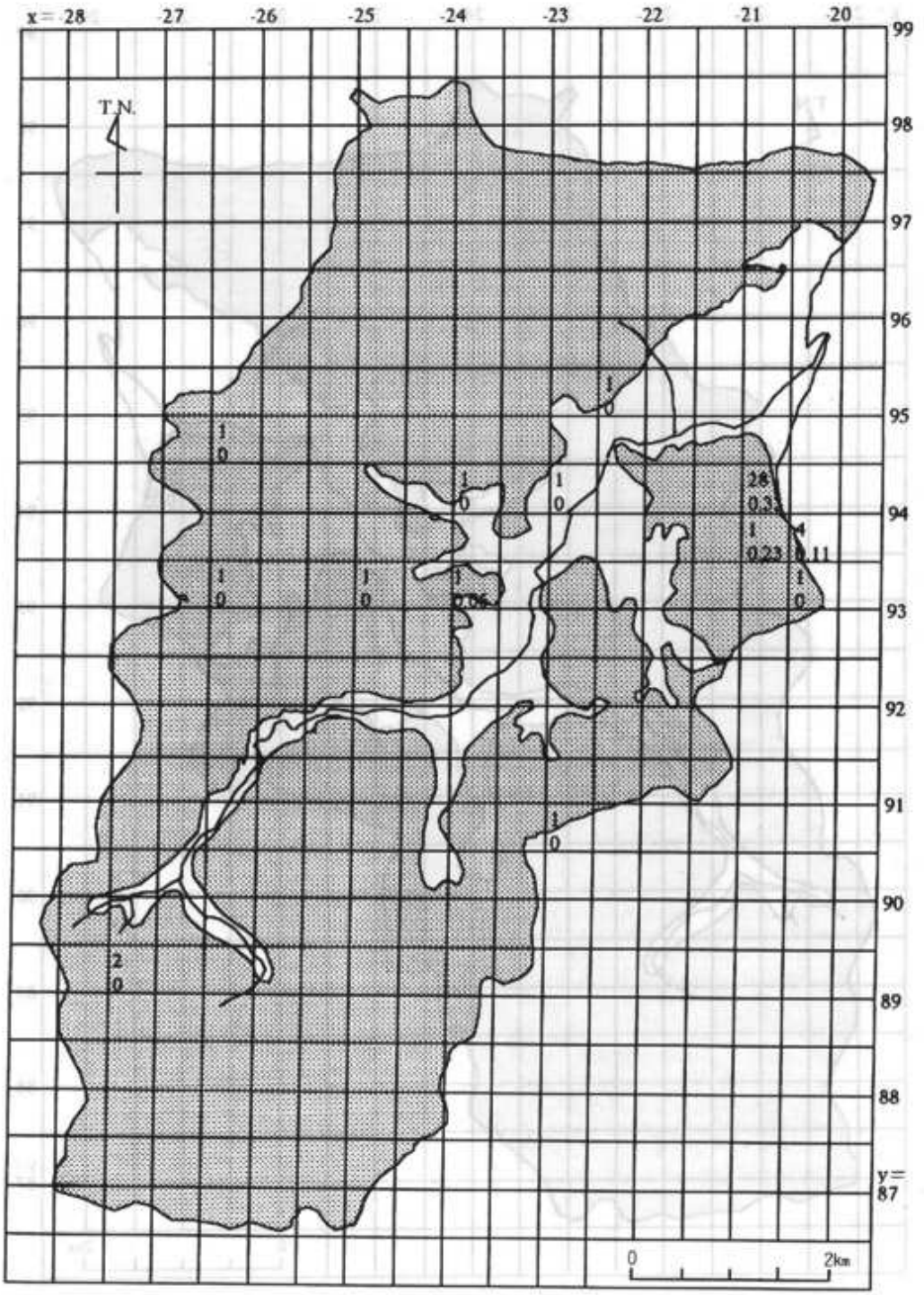
第4図　D地区遺跡分布図（遺跡名は図版11～18参照）



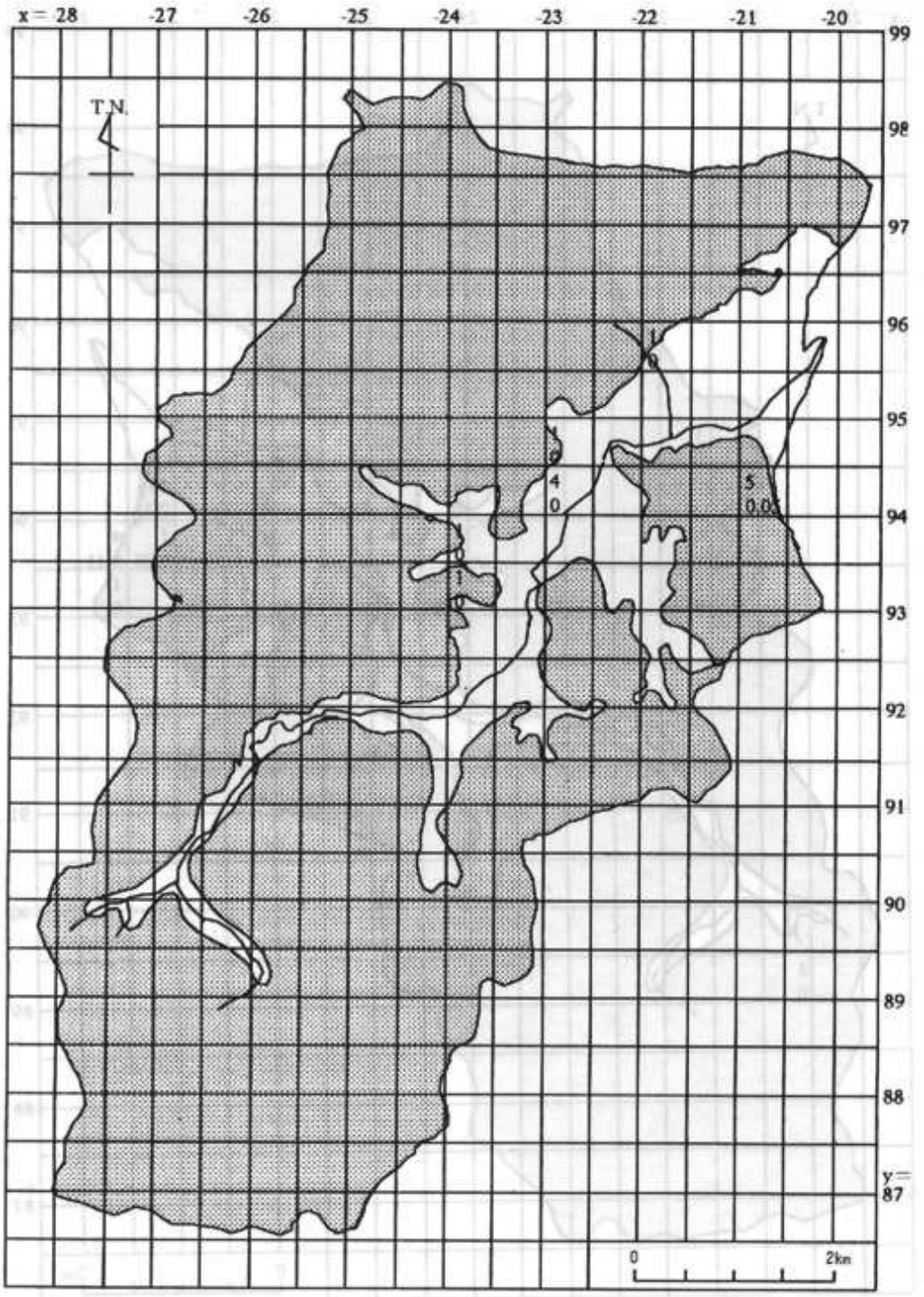
第5図　古代遺物の散布状態（上段：破片数、下段：口縁部個体数）



第6図　中世遺物の散布状態（上段：破片数、下段：口縁部個体数）



第7図　近世遺物の散布状態（上段：破片数、下段：口縁部個体数）



第8図　時期不明遺物（弥生～古代）の散布状態
（上段：破片数、下段：口縁部個体数）

たためか，遺跡のほとんどが丘陵上に立地する。特に（x＝－26，y＝87.5）地区を中心とする丘陵では，氷見市（縄文早期・中期の坪池白坂遺跡他）から高岡市（縄文中期から晩期前半の勝木原遺跡）にかけて縄文遺跡が点々と広がっている。

弥生時代の遺物も今回は採集できなかった。この地区で確認できる弥生時代の遺跡は終末期の小久米A遺跡のみである。

古墳時代については，この地区では多くの古墳を確認している。ただしこれに対応する集落は確認できていない。古墳周辺の3地区から須恵器4片を採集したが，数が少ないことと，古墳時代の遺物と特定しにくいことから，時期不明の散布図に入れた（第8図）。

古代の遺物は，平野部・丘陵裾部で採集できた。遺跡も同様に分布している。

中世は遺物の採集量は少ないが，上庄川中流の小久米地区に遺跡が集中しており，また中世の墓地，寺院など宗教関係の遺跡が丘陵部に増えたと考え得る。

近世は遺物の採集量が他の時代よりも多く，山間部の遺物採集地点も増えている。

最後に今回採集した遺物の総量は91片と例年に比べて極めて少ない。その理由として，丘陵部の遺跡は古墳や山城が多く，遺物を採集しにくい状況であること，平野部の周知の遺跡のほとんどがほ場整備工事の際に遺物が確認された遺跡であり，現状では客土のために容易に把握できない，ということがあるであろう。

本年度調査地区の主要な部分をなす上庄川中流域には，弥生時代末以後を中心とする周知の遺跡が密集している。本地区は安定した場であり，また能登と越中を結ぶ交通の要所であるため，氷見市域の中でも重要な地区の一つであったと推察できる。　　（小幡鮎子・後藤 晋）

第3章　おわりに

1996年度のD地区遺跡詳細分布調査において，102片・口縁部4.55個体分の資料を採集して，4箇年の調査採集遺物の総量は，4039片・23.14個体分となった。また本調査によって，新たに日詰コブクロ遺跡（古墳時代・古代）・熊無遺跡（中世）・上田G遺跡（中世・近世）の3遺跡を設定し，D地区の遺跡総数は63となった。さらに田江大畠遺跡は縄文時代の遺跡として周知されていたが，新たに古代を含む遺跡として確認できた。また上田南儀遺跡は縄文時代及び古代の遺跡として知られていたが，今回の調査で近世にも遺跡が存在することを確認した。

D地区は氷見市の南西部にあたり，上庄川・論田川を中心とする平野の奥部と谷・丘陵からなっている。1994年度には，下流域の平野・海岸部・丘陵にあたるB地区を調査しており，その成果と合わせると，一つのまとまりをなす地域について全て分布調査を実施したことになる。この二つの地区にまたがる谷は上庄川に沿って形成され，氷見市において最も規模の大きなものである。そのため，この谷には川沿いを中心にして縄文時代から近世にかけて多くの遺跡が形成されてきた。

本年度の成果については，前章において述べているので，ここではB地区の知見を加えて，海辺・平野・開析谷・丘陵（海・里・山）という3種の地勢に大別し，この地域で人々がどのような暮らしを営んできたかを考えることとする。

縄文時代の前半は，現在の平野の奥にまで，内湾性の海域が広がっていたと推定されており，人々はこの環境のもとで豊かな海産資源を利用して暮らしを営んでいたであろう。遺跡はB地区の海岸付近にある朝日貝塚を除いて，ほとんどが丘陵上に立地し，前回調査したC地区と高岡市の一部を含めた小矢部川左岸丘陵に分布する遺跡群と一連のものとして捉らえることができる。

縄文時代中期以降，気温の下降による海退現象が起こった。そのため弥生時代に入ると海岸線はほぼ現在に近いものとなり，遺跡の分布は海岸部が中心となっていく。しかし現在のところ，弥生時代の遺跡の分布を面的に捉らえることは難しく，分布は点的である。このあり方は弥生時代の終末期に変化し，上庄川の中流域の谷を見下ろすことができる丘陵上に小久米A遺跡をはじめとする遺跡が営まれはじめ，遺跡の分布が丘陵裾や谷口へも広がっていくこととなった。

古墳時代には，遺跡の分布は上庄川中流域に集中するようになり，その谷を見下ろすことができる丘陵上に多くの古墳を築造するようになった。

古代においても，この地域に小窪廃寺・小窪瓦窯跡を造営するなど，ひきつづき上庄川中流域に遺跡が集中している。

中世においても遺跡の分布は似た様相を示すが，この時期には丘陵部に山城や中世墓を築く

など，立地条件を生かした様々な営みを行うようになった。文献からは，上庄川中流域において14世紀に氷見町が成立した可能性が指摘されている（氷見市 1963）。

本年度調査地区における近世遺物の採集地点は，前年に比べ限られたものとなり，その中心はB地区の海岸部周辺に移る。おそらく近世から現在に至るまで集落は主として丘陵裾に営まれ，その立地にはあまり変化が無かったと考えられる。このため，現在の集落下に遺跡が存在し，今回の調査では遺物を採集することができなかったものと推測する。

この地域は，氷見市の中では一番平野が安定し，また地理的にも能登と越中との結節点であったため，氷見市の中でも重要な地域の一つとなってきた。

『万葉集』には，当時越中国司であった大伴家持が能登に巡行する際に，この地を通ったことが記されているが，越中国府と能登一宮気多大社やこれと関連する可能性をもつ寺家遺跡とを結ぶ之乎路（志雄路）がこの上庄川中流域を通っていたと考えられている。

その前段階を考えるならば，海岸部を中心に立地した集落のあり方が大きく転換し，上庄川中流域の谷を見降ろす位置に集落が成立した弥生時代終末期には，このルートが確立していた可能性が高いであろう。また，このルート沿いに古墳が集中するあり方は，後の北陸道沿いに古墳を多く営んだ小矢部市域と同様である。古代に入ると，この上庄川中流域においていち早く小窪廃寺・小窪瓦窯が成立することも，当地域のもった重要性に根差すのであろう。

中世の様相は明らかではないが，前述のように当地において氷見町が成立した。そして近世に入ってもこの志雄越えの道は幕府の御上使往来巡視の際の官道にあてられたことがわかっている。之乎路（志雄路）のルート沿いにあたるこの上庄川中流域は，弥生時代終末期以降近世に至るまで歴史上，重要な位置を占め続けたものと推察する。つまり，この地域の様相を解明していくことは越中と能登のみならず，日本海域の歴史を考えていく上でも重要であると考えることができるであろう。

今後の課題としては，丘陵高地部と論田地区の問題をあげておきたい。丘陵高地部については今回の調査においても中世寺院関係の資料を増すことができた。本調査は平坦地における遺物採集を中心とするものであるが，丘陵高地部においても綿密な調査を行うことによって，基礎資料の一層の充実を図ることができるであろう。今後は，特に宗教施設や域と人々との関わりについて解明していきたい。また今回の調査区の北西部にあたる論田地区は，第1章において述べたように地滑り地帯であり，調査があまり進んでいない地区であった。しかし，今回の調査において熊無遺跡のような本格的な中世墓地を発見したように，この地域にも，多くの遺跡が存在する可能性のあることがわかってきた。今後はこのような地域についても調査を進め，より多くの情報を得る努力を行っていきたい。

（河合 忍・稲石純子・近藤美紀・宇野隆夫・前川 要・大野 究）

参考文献

大野 究　1990「久目村の考古資料」『久目村史』

大野 究　1992「坪池白坂遺跡の資料」『氷見市立博物館年報』第10号

大野 究　1994「イヨダノヤマ古墳群」『埋文とやま』富山県埋蔵文化財センター所報第48号

高岡 徹　1990「氷見南部地域における中世山城とその性格」『富山市日本海文化研究所紀要』第4号

富山県立氷見高等学校歴史クラブ 1961『故郷の城址』

富山県立氷見高等学校歴史クラブ 1964『富山県氷見地方 考古学遺跡と遺物』ー氷見高歴史クラブ報告書No11

富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会 1993『珠洲大畠窯』

西井龍儀 1971「氷見市谷屋発見の子持勾玉」『考古学ジャーナル』No54

西井龍儀 1987 a「小窪瓦窯跡」『北陸の古代寺院』桂書房

西井龍儀 1987 b「小窪廃寺」『北陸の古代寺院』桂書房

橋本芳雄 1955「小窪廃寺の心礎と瓦窯址」『越中史壇』第5号

林喜太郎 1930「熊無村横穴古墳」『富山県史跡名勝天然記念物調査報告』第10号

氷見市 1963『氷見市史』

氷見市教育委員会・氷見市立博物館 1983『氷見市遺跡地図』氷見市文化財所在地図No 1

氷見市教育委員会 1984『富山県氷見市小久米古墳群・小久米A遺跡試掘調査報告書』

氷見市教育委員会 1985『富山県氷見市小久米A遺跡試掘調査報告書』

氷見市教育委員会 1989『脇方横穴群 一般国道160号灘浦トンネル拡幅工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査』

氷見市教育委員会 1993『氷見市遺跡地図〔第2版〕』氷見市埋蔵文化財調査報告書第14冊

氷見市教育委員会 1993『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ』氷見市埋蔵文化財調査報告書第16冊

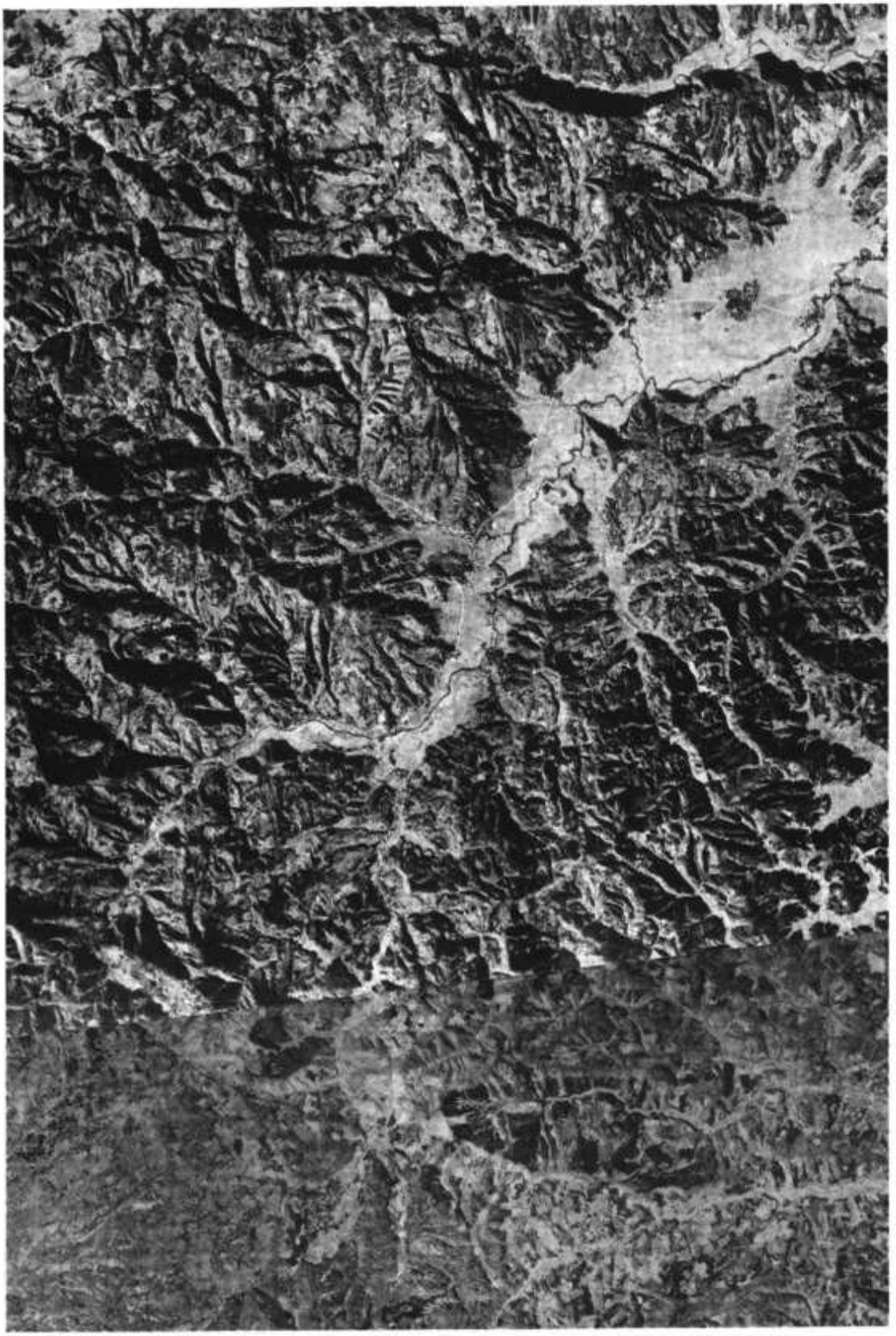
氷見市教育委員会 1994『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ』氷見市埋蔵文化財調査報告書第17冊

氷見市教育委員会 1995『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ』氷見市埋蔵文化財調査報告書第20冊

藤田富士夫 1983『富山』日本の古代遺跡13，保育社

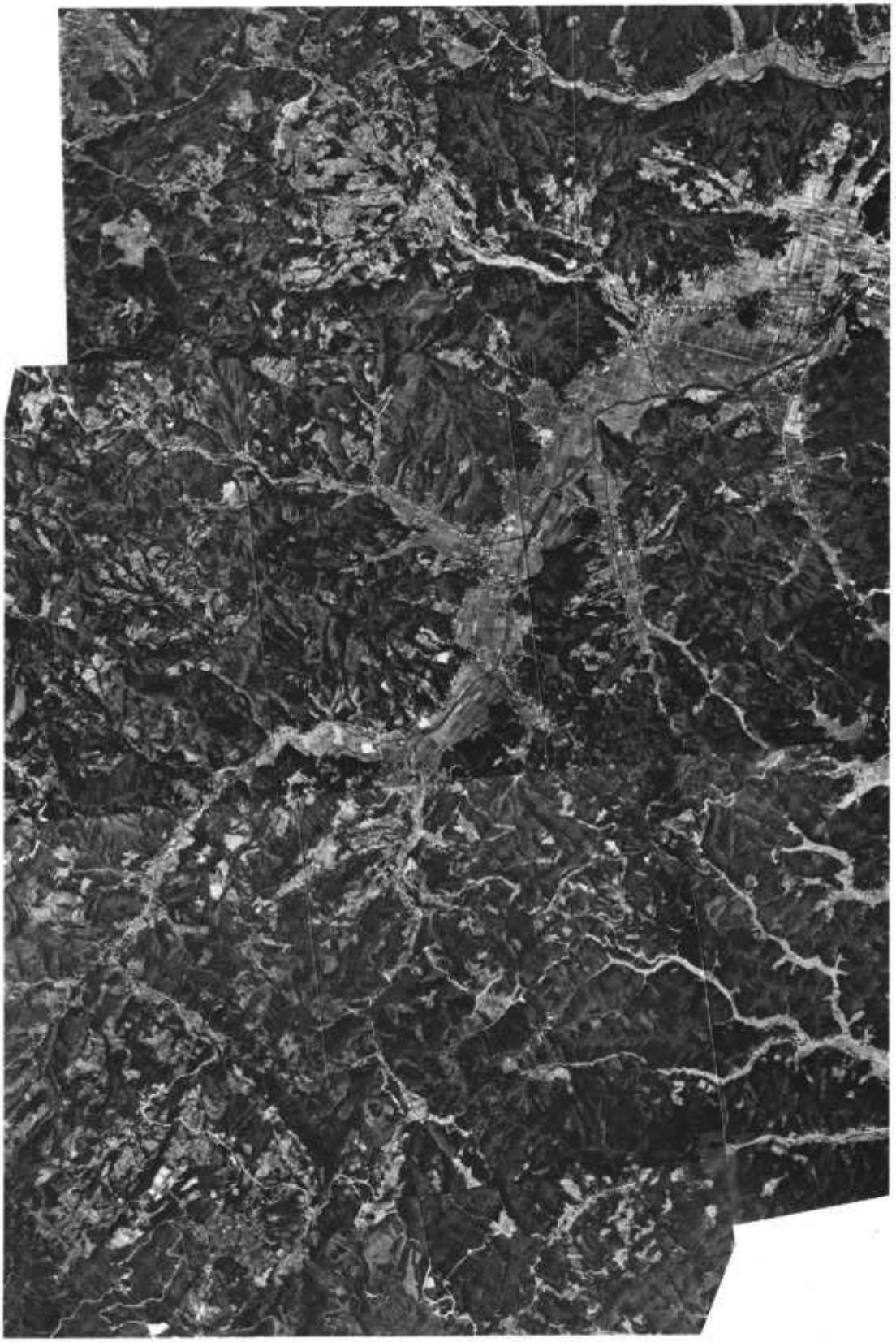
図　　版

図版一　D地区航空写真（一）



1947年撮影（縮尺 1/54,760）

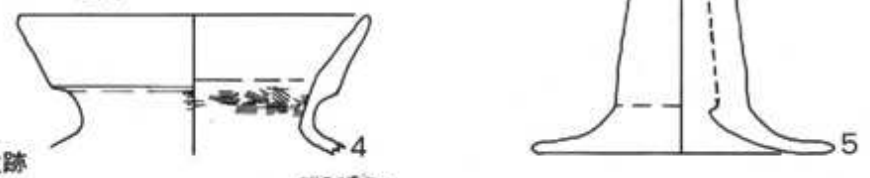
図版二　D地区航空写真(二)



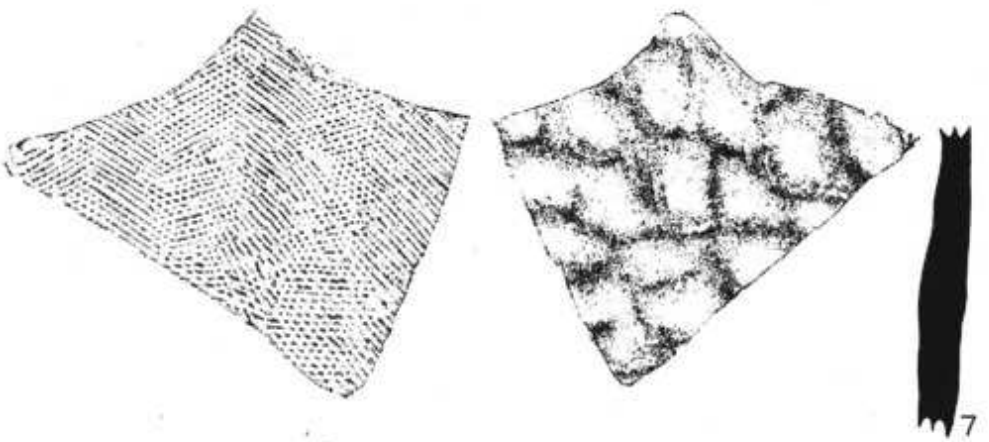
1992年撮影（縮尺 1/54,760）

小窪廃寺遺跡

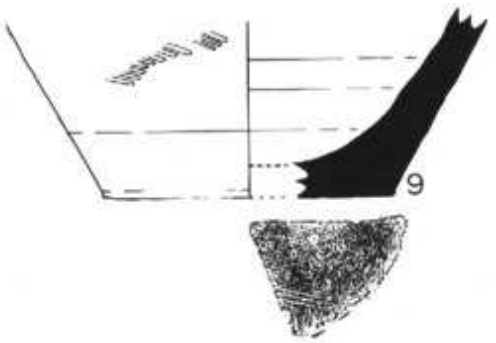
日詰コブクロ遺跡

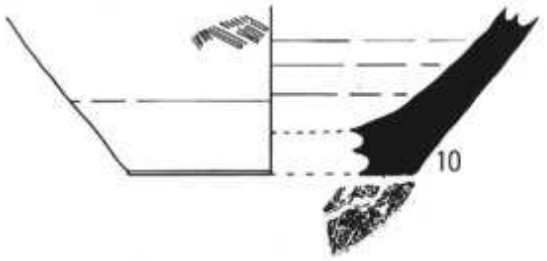


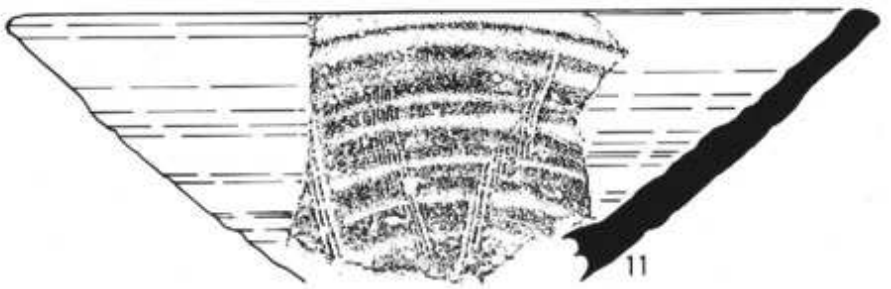
熊無遺跡



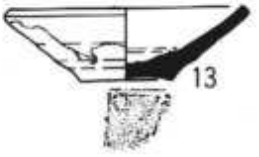
熊無遺跡







上田G遺跡



遺跡外採集品

x＝−22.5、y＝93地区

x＝−21、y＝94地区

x＝−24.5、y＝97.5地区

x＝−20.5、y＝93.5地区

x＝−24、y＝93地区

x＝−25、y＝93地区

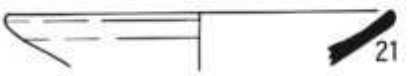
x＝−22、y＝95.5地区

x＝22.5、y＝−94.5地区

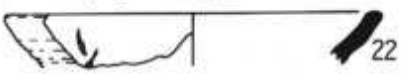
x＝−20.5、y＝97地区

x＝−21、y＝94地区

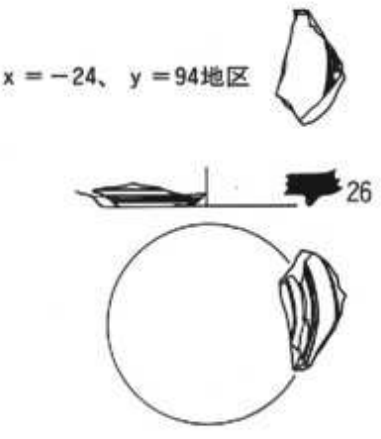
x＝−21、y＝94地区



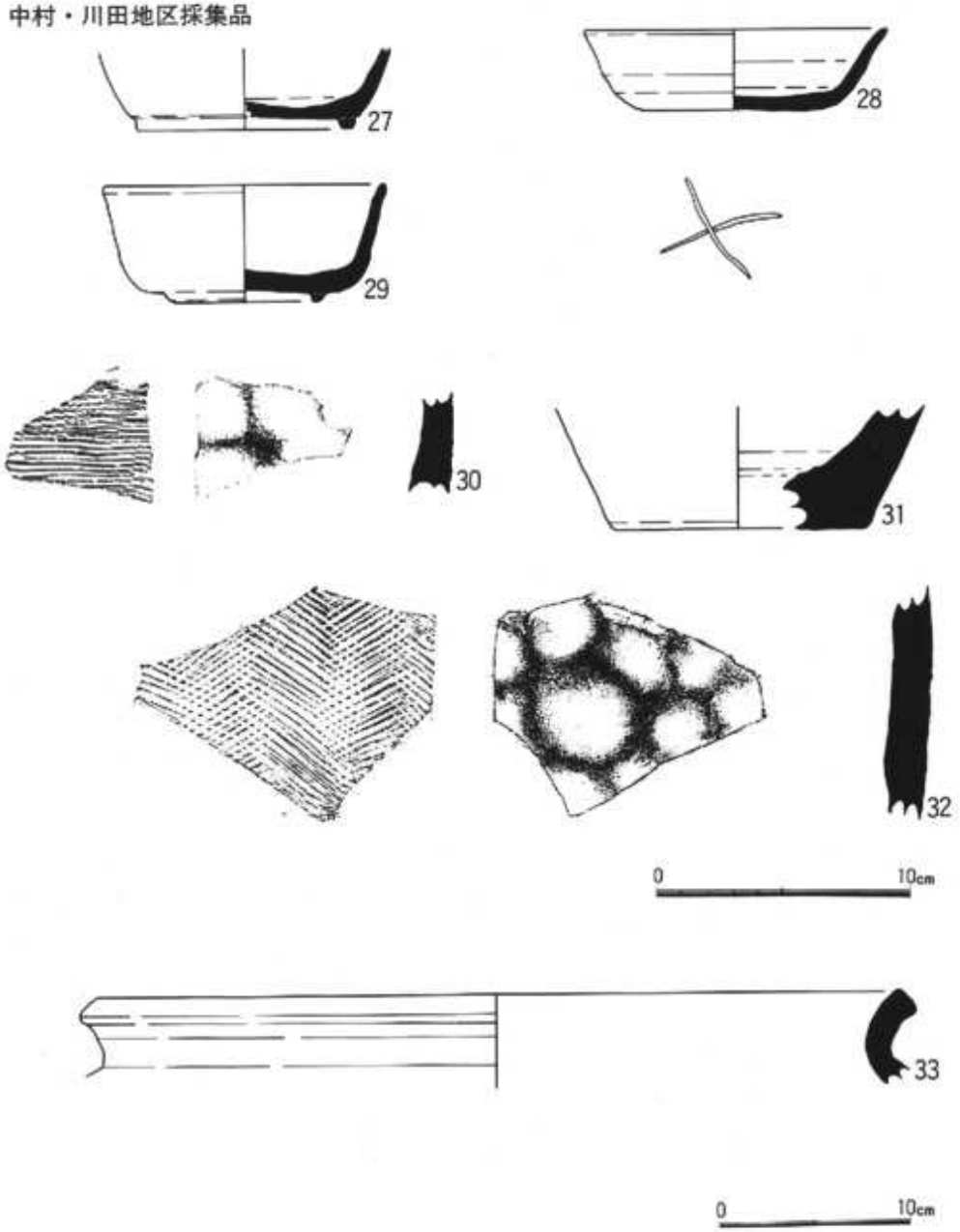
x＝−21、y＝94地区

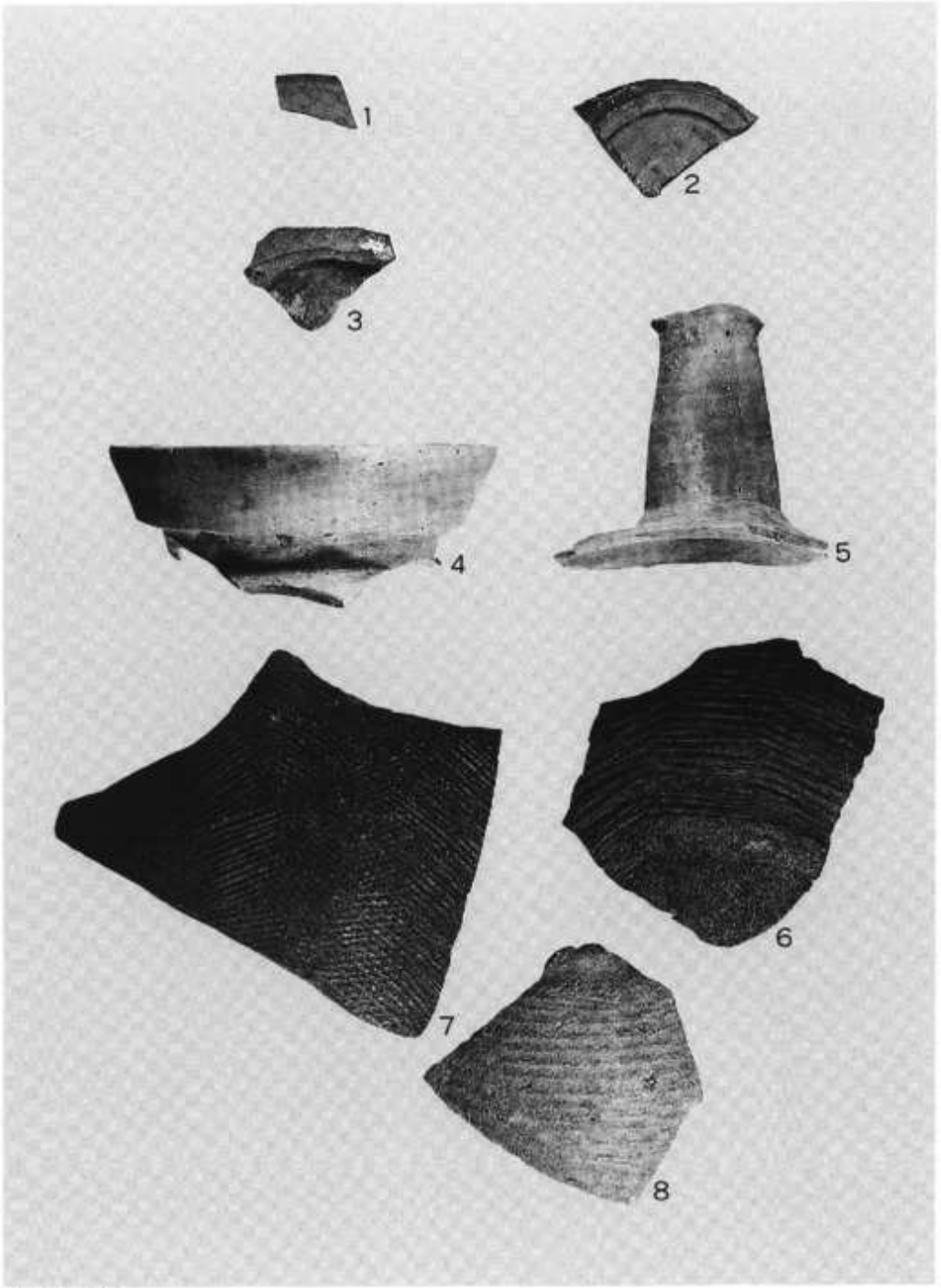


x＝−24、y＝94地区

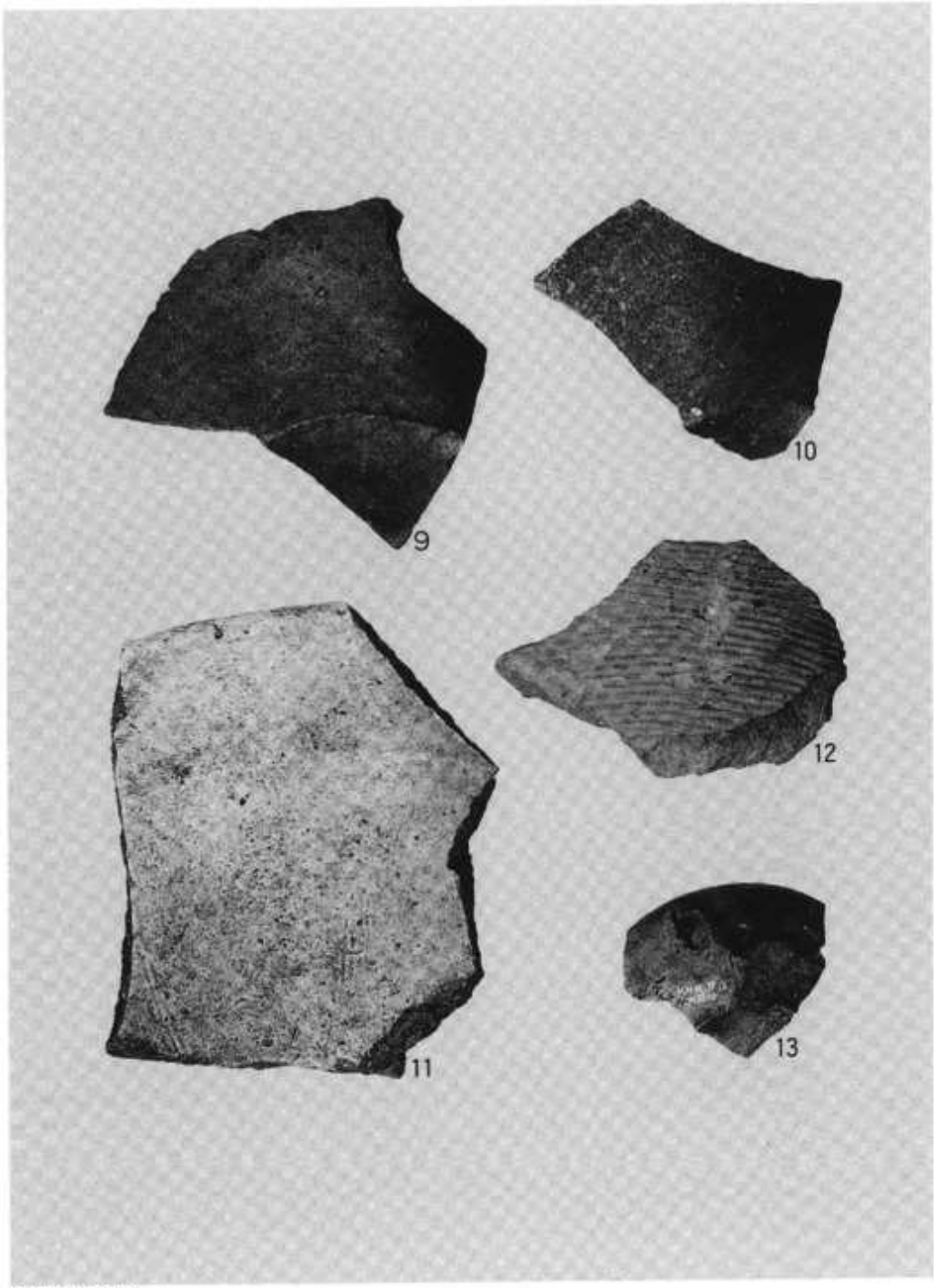


中村・川田地区採集品

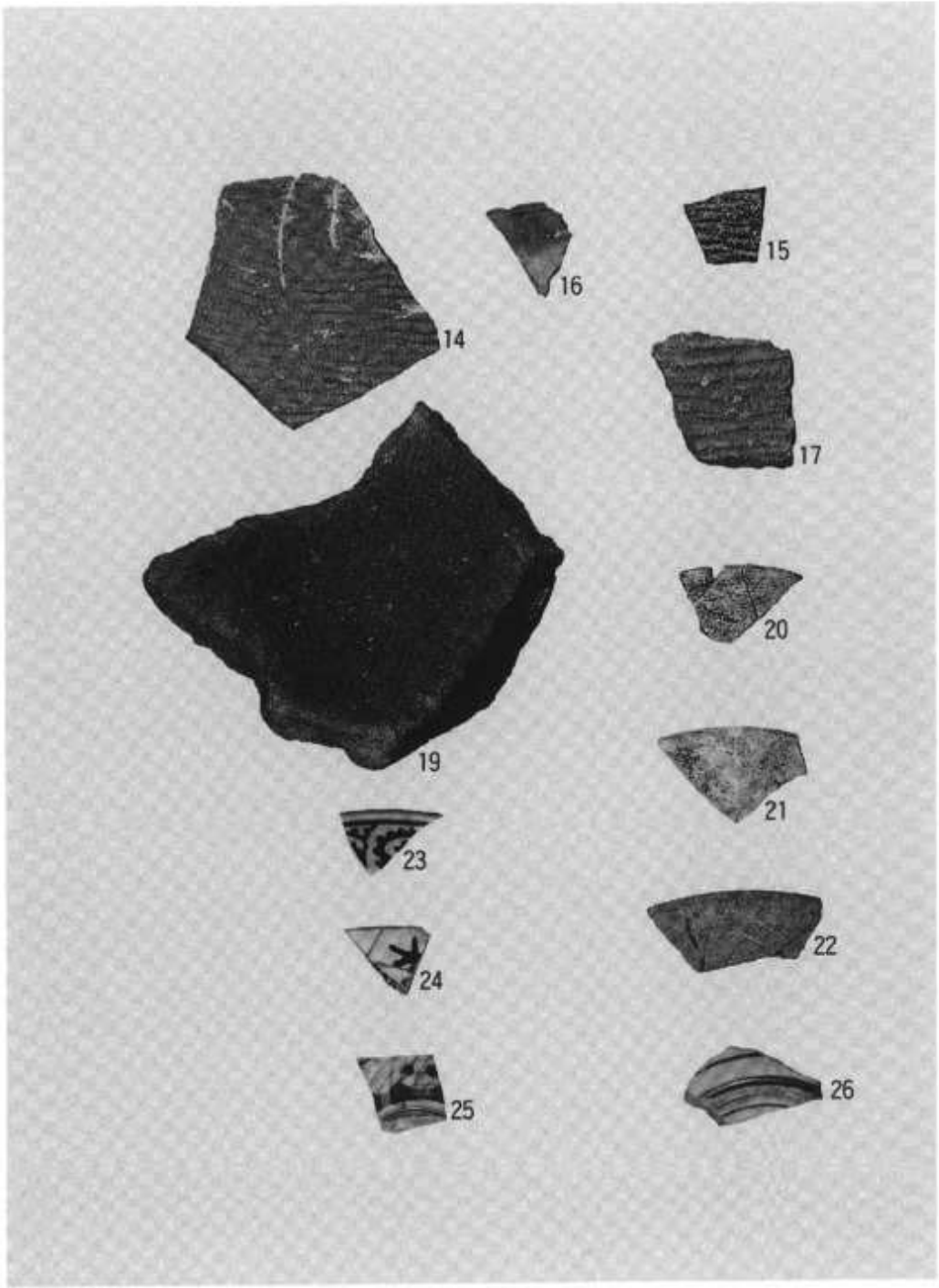




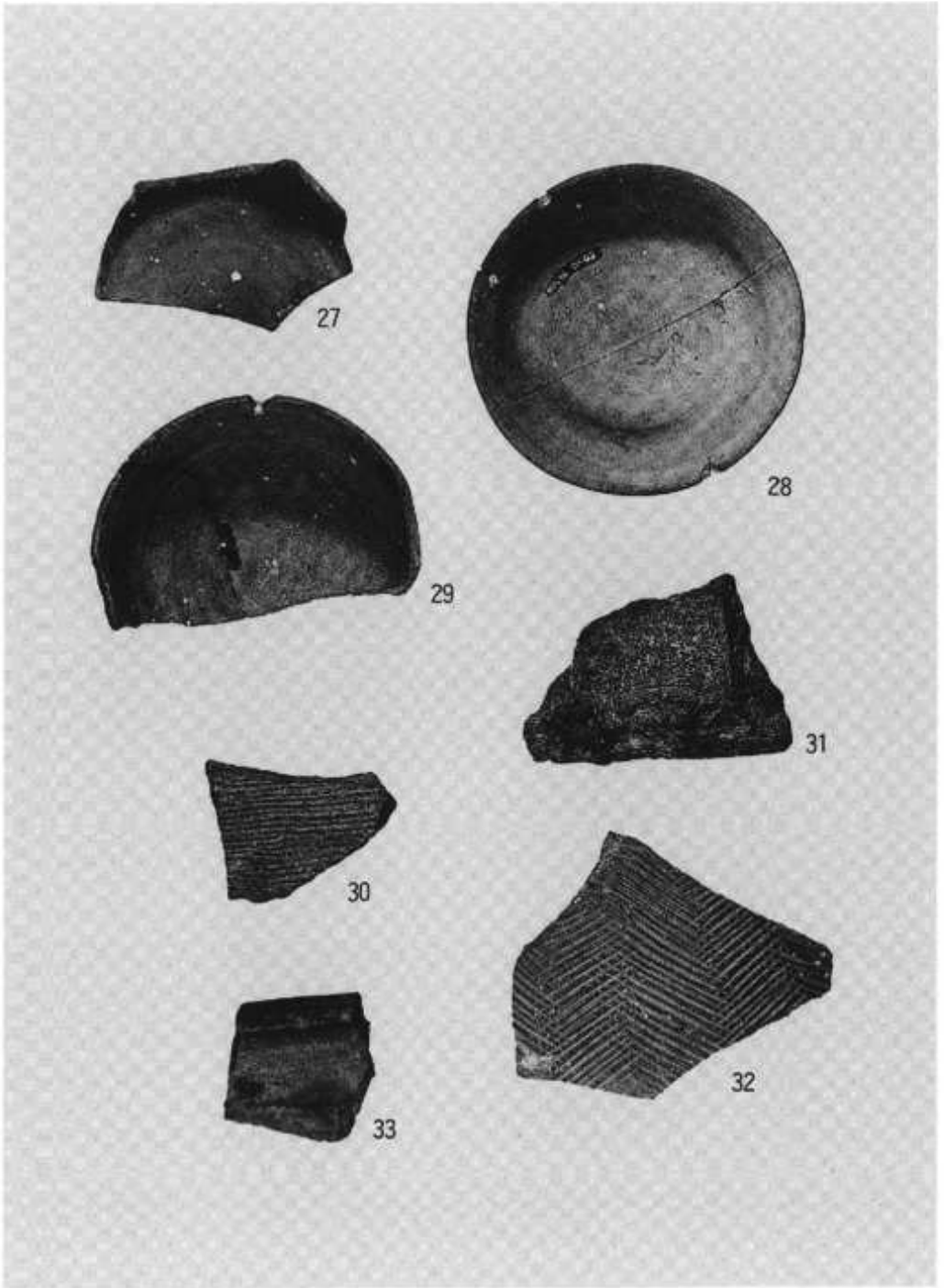
（図版3 参照）



(図版4 参照)

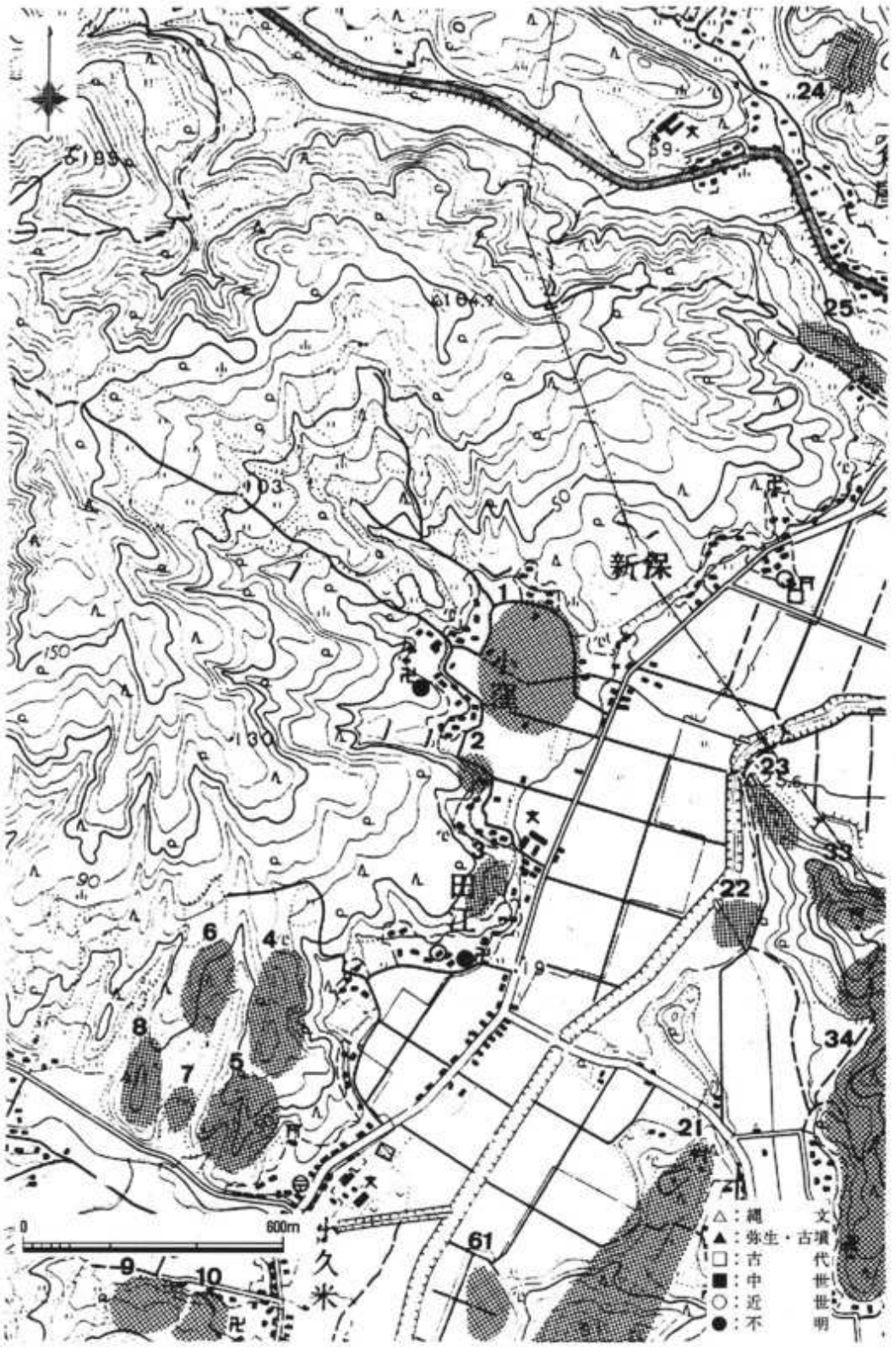


(図版5 参照)



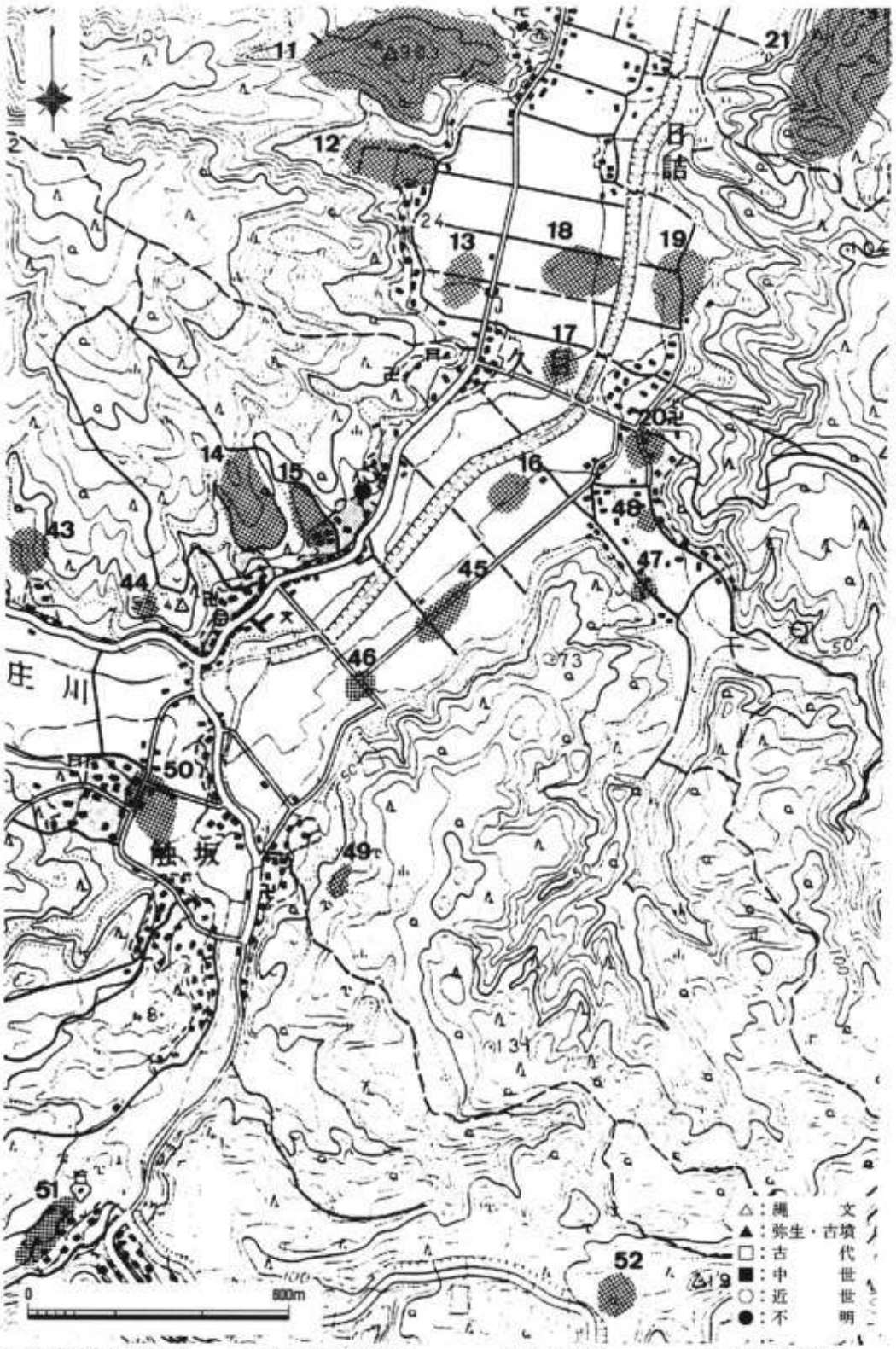
(図版6 参照)

図版一一　D地区の遺跡と遺物採集地点(一)



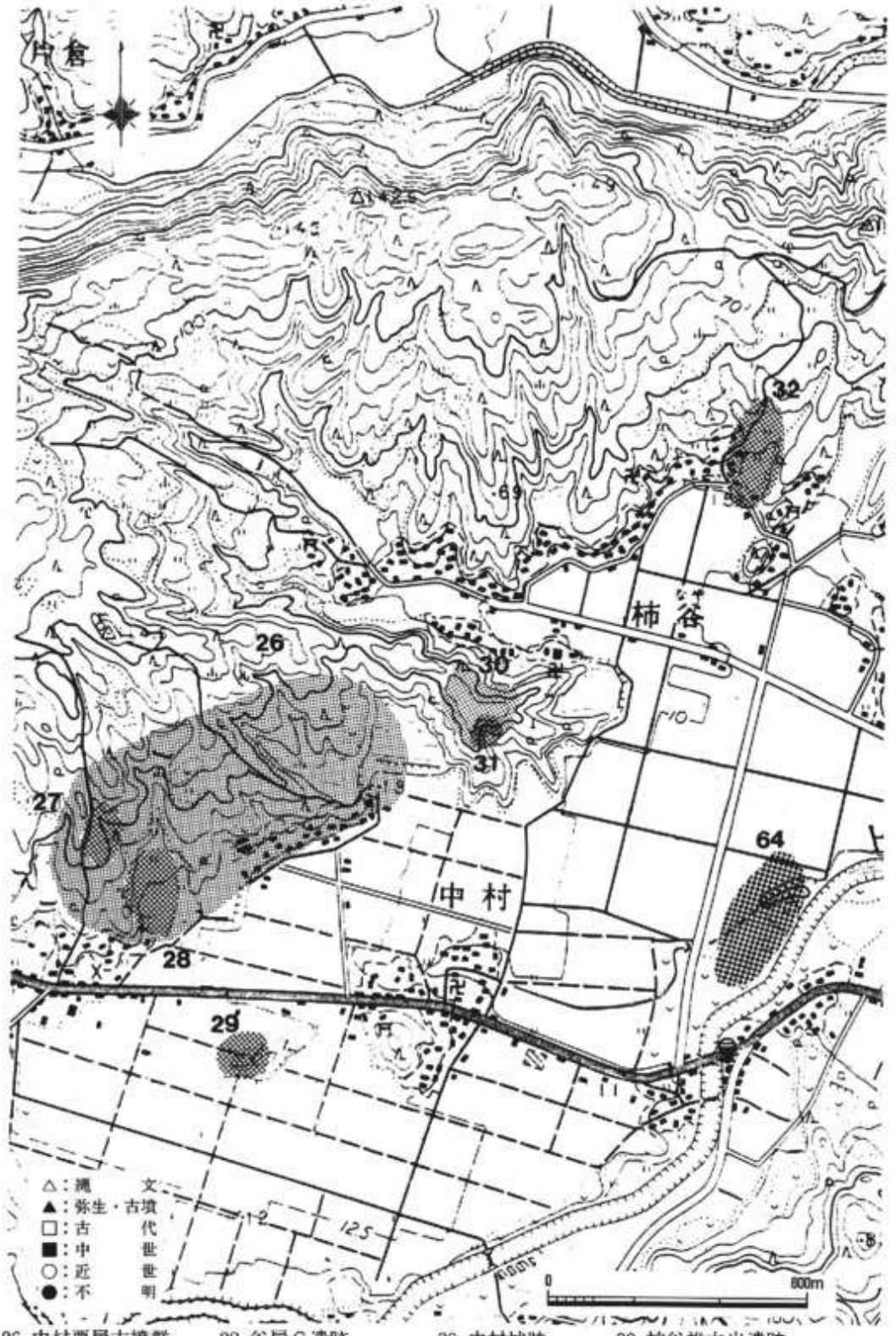
1 小窪廃寺
2 小窪瓦窯
3 田江大畠遺跡
4 田江古墳群
5 小久米B古墳群
6 小久米B遺跡
7 小久米番場谷内遺跡
8 白名田古墳群
9 小久米A遺跡
10 小久米A古墳群
21 早借ヤワタ古墳群
22 早借サカタ遺跡
23 新保横穴群
24 谷屋A遺跡
25 新保城跡
33 速川神社古墳群
34 滝尾山遺跡
61 日詰コブクロ遺跡
(縮尺 1／5,000)

図版一二　D地区の遺跡と遺物採集地点(二)



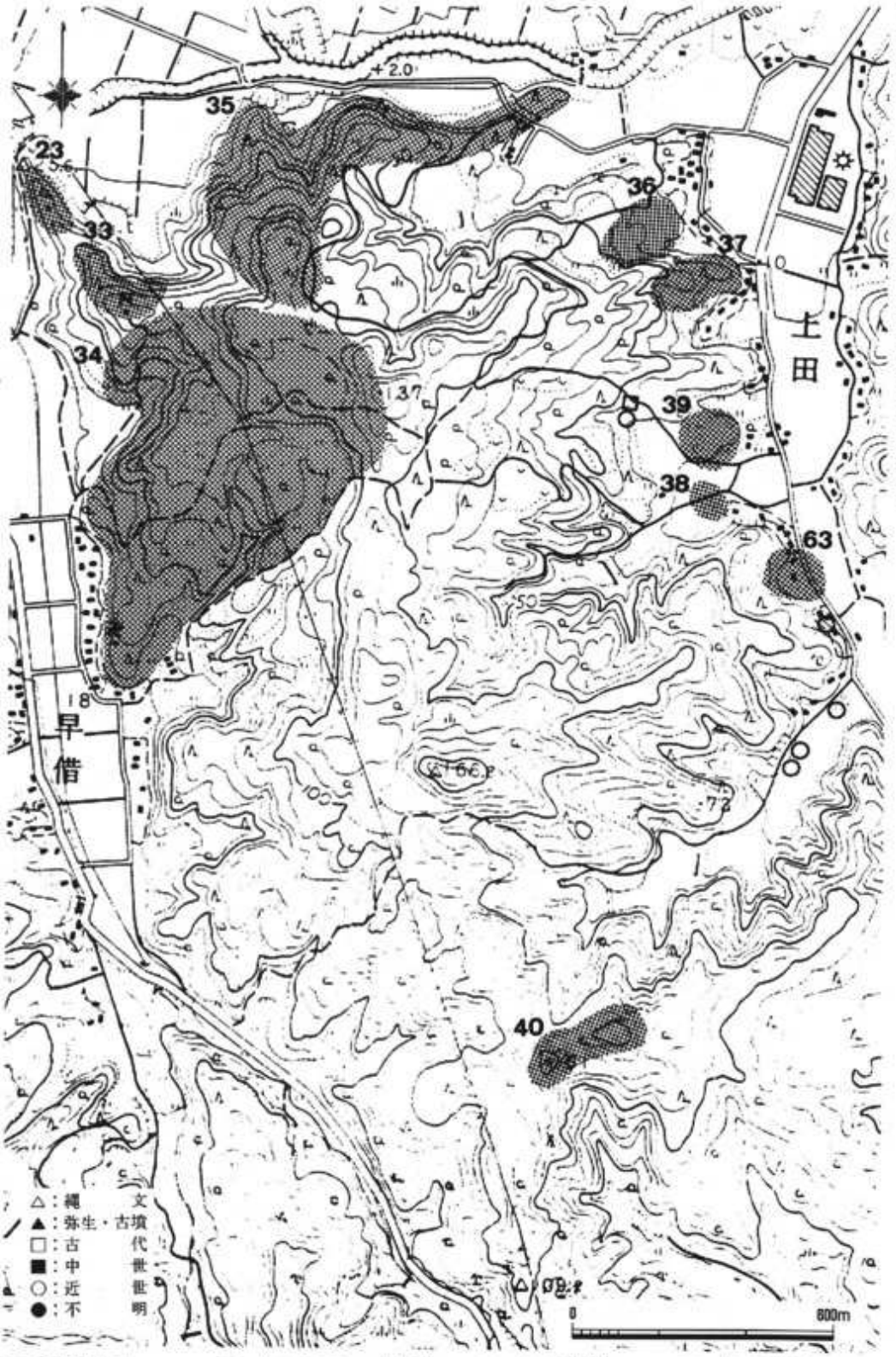
11 小浦城(池田城)跡
12 久目千元遺跡
13 久目子浦谷内遺跡
14 久目梨谷古墳跡
15 久目梨谷遺跡
16 久目大町遺跡
17 久目桑の木遺跡
18 久目トリノマエ遺跡
19 久目安楽寺遺跡
20 久目ゾウダナ遺跡
21 早借ヤクタ古墳群
43 見内モリヒサ遺跡
44 久目経塚
45 久見覚地遺跡
46 久目浄仙遺跡
47 久目朴木遺跡
48 久目大坪遺跡
49 堂谷山古墳
50 触坂広瀬遺跡
51 桑ノ院吉谷遺跡
52 桑ノ院金山遺跡
(縮尺 1／5,000)

図版一三　D地区の遺跡と遺物採集地点(三)



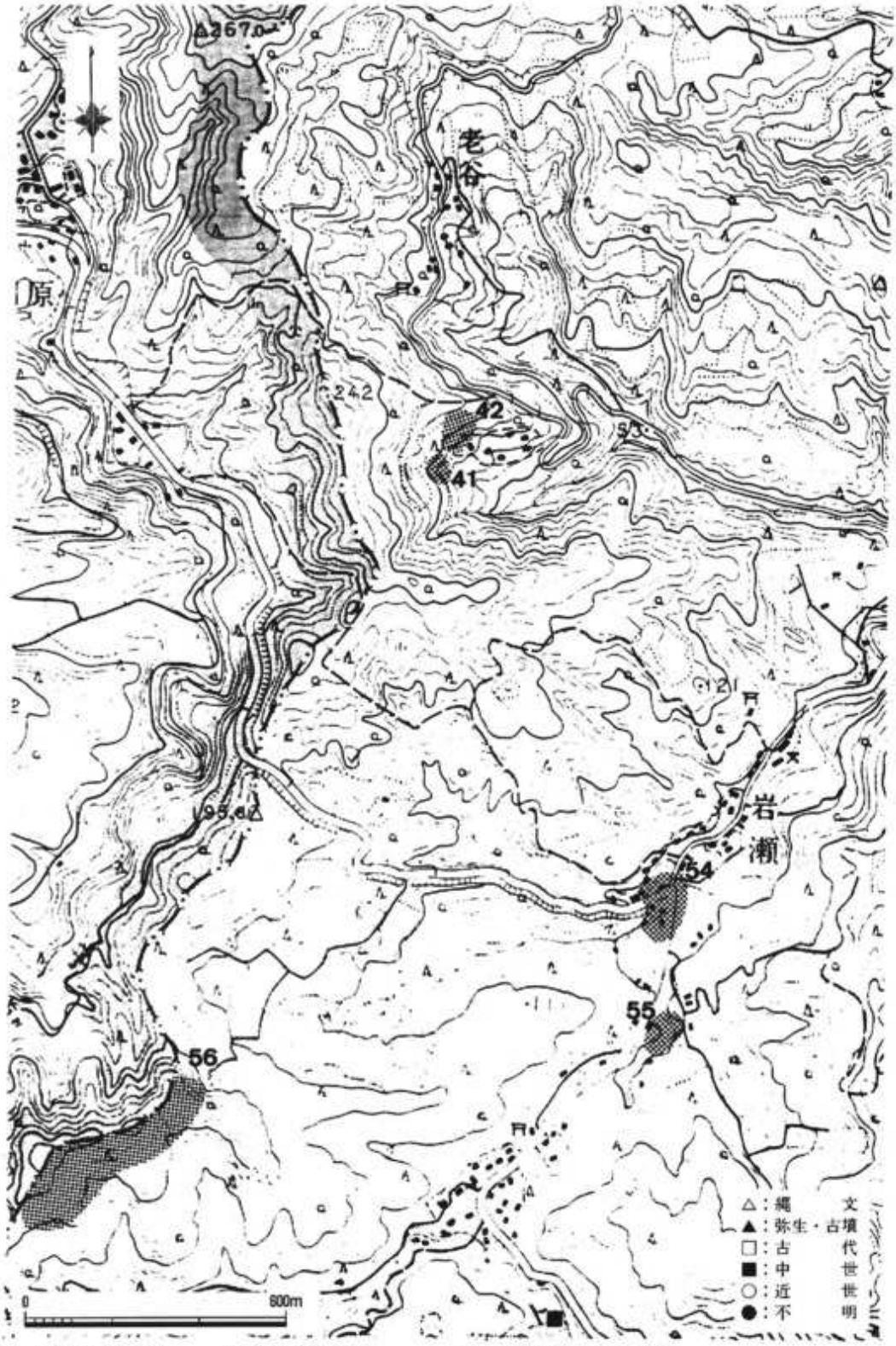
26 中村栗屋古墳群　28 谷屋C遺跡　30 中村城跡　32 柿谷椎木出遺跡
27 谷屋B遺跡　29 中村天場山古群　31 中村横穴群　64 中村川田遺物採集地点
(縮尺 1／5,000)

図版一四　D地区の遺跡と遺物採集地点(四)



23 新保横穴群
33 速川神社古墳群
34 滝尾山遺跡
35 イヨダノヤマ古墳群
36 上田C遺跡
37 上田D遺跡
38 上田E遺跡
39 上田南儀遺跡
40 高松城跡
63 上田G遺跡
(縮尺 1/5,000)

図版一五　D地区の遺跡と遺物採集地点(五)



41 老谷滝の上遺跡
42 老谷遺跡
54 岩瀬番畑遺跡
55 岩瀬谷内の前遺跡
56 一の島城(岩瀬城)跡
(縮尺 1／5,000)

図版一六　D地区の遺跡と遺物採集地点(六)

53 御林山城(鞍骨山城)跡

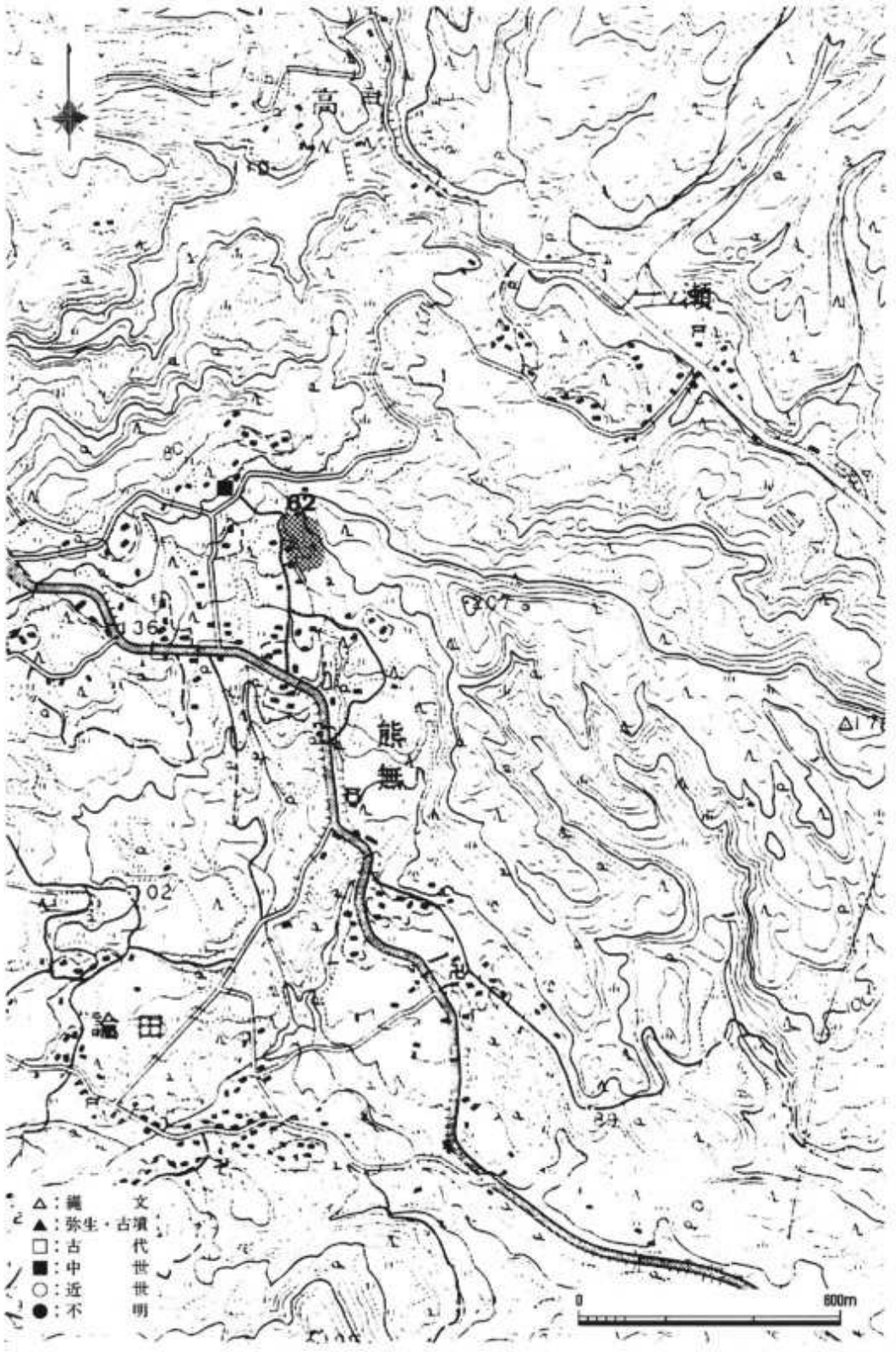
(縮尺 1/5,000)

図版一七　D地区の遺跡と遺物採集地点(七)

57 坪池白坂遺跡　58 土倉ゴマジマチ遺跡　59 土倉稲村遺跡　60 坪池シャンドン遺跡

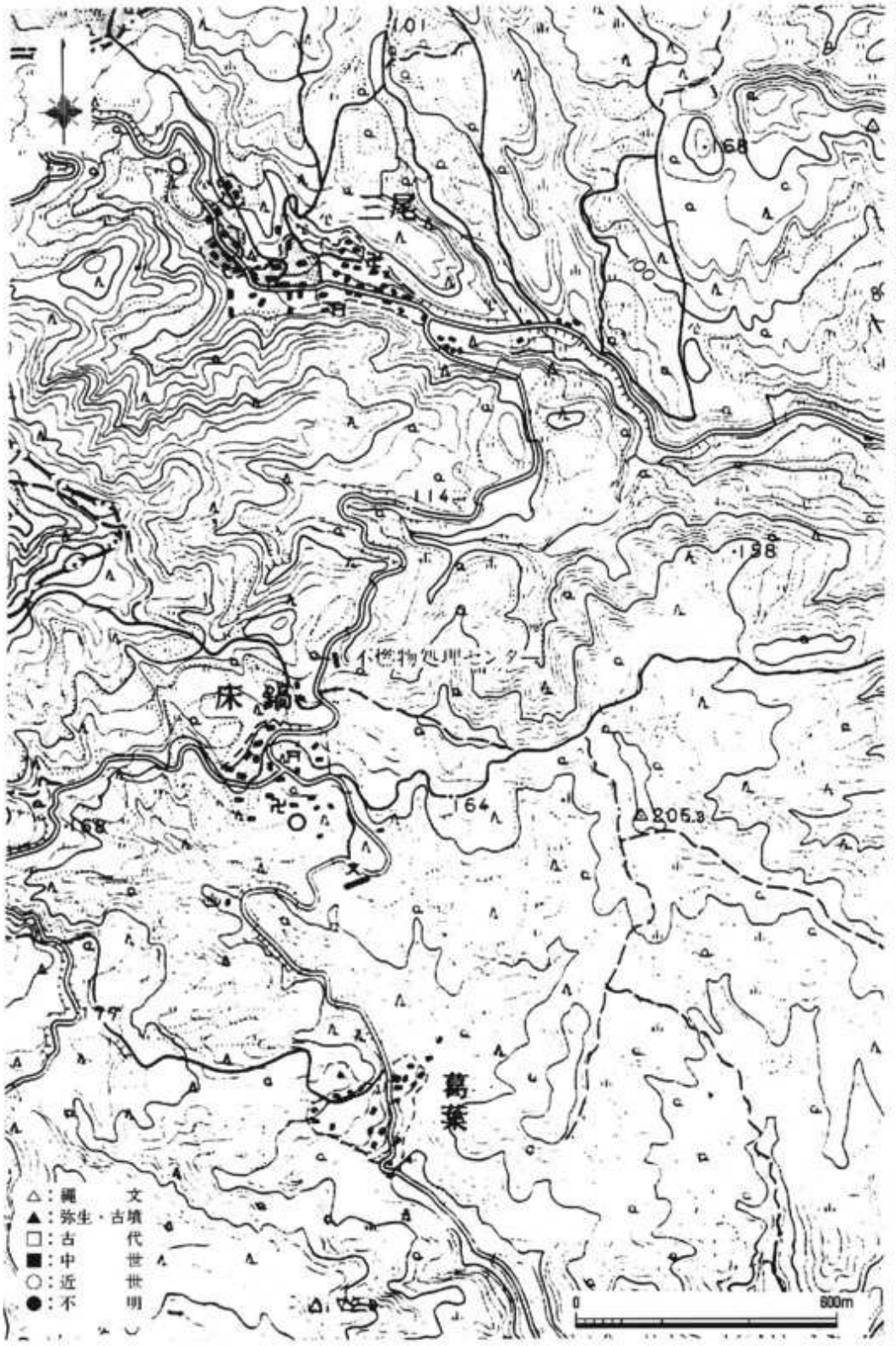
(縮尺 1／5,000)

図版一八　D地区の遺跡と遺物採集地点(八)



62熊無遺跡　　(縮尺 1/5,000)

図版一九　D地区の遺跡と遺物採集地点(九)



(縮尺 1/5,000)

1997年3月25日　印刷
1997年3月31日　発行

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅳ
氷見市埋蔵文化財調査報告書第23冊

編集・発行　氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室

印　刷　ヨシダ印刷株式会社